日本女子讀本

改制第一版

卷三

375.9
Ta11
資料室

43146
教科書文庫
4
810
42-1937
2000.0
307748

資料室
375.9
Ta11

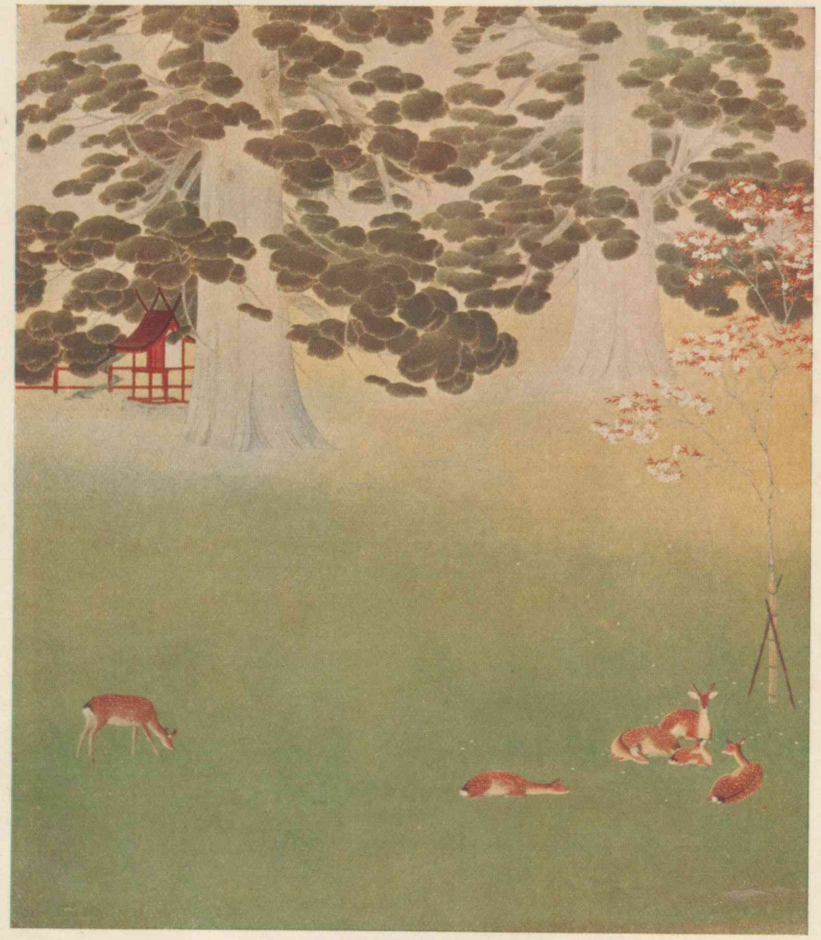
文部省檢定濟
昭和十二年二月二十七日　高等女學校國語科用

文學博士　高木武編

日本女子讀本

改制第一版

東京　冨山房藏版



春日野　松元道夫筆

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
30748
図書

日本女子讀本

改制第一版　卷三

目次

一　千年の都　高村光太郎　一
二　春駒（詩）　荻原井泉水　八
三　お遍路さん　楠山正雄　九
四　春の大和路　一五
　一　早春の奈良　一五
　二　西の京　一九
　三　斑鳩　二三

四 南大和の山 二三
五 飛鳥の古京 二四
五 徳川吉宗の寛仁 菊池寛 二六
一 二六
二 三二
六 山の木と大鋸 志賀直哉 三六
七 赤城沼 吉植庄亮 四七
八 君が代の歌 芳賀矢一 五三
九 奥村五百子 本野久子 五六
一〇 軍用犬クラウ 中根榮 六七
一一 南京の壺と提燈 柴田鳩翁 八一
一二 峠の家 今井邦子 八九

一三 航海 田山花袋 九八
一四 椰子の實（詩） 島崎藤村 一〇六
一五 女學生風俗 土岐善麿 一〇八
一六 涼味の記憶 吉村冬彦 一一四
一七 樂地 幸田露伴 一一九
一八 歌ごころ 北原白秋 一二三
一九 ふるさと（短歌） 石川啄木 一二九
二〇 新義州より奉天まで 安倍能成 一三三
二一 新秋のたより（書翰） 一四四
一 鈴蟲を贈る 蜂須賀隨子 一四四
二 觀月のおさそひ 大塚楠緒子 一四五

三 秋さびし　徳富健次郎　一四八
三 猿心　古賀忠道　一四九
二四 笑話と喩言　一五五
一 文盲の犬（醒睡笑）　一五五
二 目じるし（同上）　一五六
三 朱槍（同上）　一五七
四 米の飯（同上）　一五七
五 鳥のをしへ（伊曾保物語）　一五八
二五 言葉の變遷　佐々政一　一六一

國民精神篇

日本國民性その一　一七〇

廣島大學圖書之印

日本女子讀本

改制第一版　卷三

一 千年の都

部落が點綴され

なだらかな圓みをもつた赤松の山と、晝も小暗く茂つた紫竹の林、その間を白くせゝらぐ幾すぢかの小川の流に沿うて、五戸の村、十戸の部落が點綴され、わびしげな砧の音や機織の唄のあひまに鷄の鳴聲が聞えるばかり。山おろしの風が藪をゆすり、野の草を分けて絶えず吹く淋しい山里、山城國葛野郡宇太村の地に、思ひもかけず數千

數萬の役夫が入りこんで、大規模な帝都建設の工事が始まつたのは、延暦十二年十二月のことであつた。

咲く花のにほふが如くと歌はれた奈良の都を去つて、桓武天皇が初めまづ山城國長岡の地を選んで都を遷さうとされたのは、山を負うて海に近く、四望の廣く開けた平野の上に萬代の帝都の礎を築かうと思し立たれた叡慮であつたと拜察される。しかもその遷都の工事が頓挫に頓挫を重ね、十年の日子と莫大な費用とを要して、いつ完成するあてもなかつた。そこで和氣清麿の議を用ひ、延暦十一年正月、遊獵に託して、同じく山城の葛野郡に行幸遊ばされ、續いて二度三度仔細にその地勢を御檢分にな

咲く花の云々　「青によし奈良の都は咲く花のにほふが如く今さかりなり」（小野老、萬葉集）

桓武天皇　第五十代。長岡　今の京都府乙訓郡にあつた。

頓挫に頓挫を重ね

遊獵に託して

仔細に

つた。それから一年、翌年の二月には賀茂神社に、三月には皇大神宮に遷都のことを御奉告あり、次いで十二月になつては早くも新都の建設に着手せしめられたのであつた。

この神速な聖斷に勵まされて、人々はふるひ立つた。あちらに五六百人、こちらに千人とおびたゞしい役夫どもが群がつて、繩を引き、土をならし、溝を掘つて、見る〳〵坦坦たる都大路が出來上つてゆく。大路は大路に交叉し、その大路からはまた無數の小路が縱横に分岐して、しかも飽くまで碁盤目をなして井然と、縱には四坊の大路、横には九條の大路が設けられる。そして皇居の敷地は都の北

賀茂神社　今、京都市上京區上賀茂に鎭座する賀茂別雷神社と、左京區下鴨に鎭座する賀茂御祖神社。いづれも官幣大社。

坦々たる都大路

部中央に定められ、その南面中央の正門たる朱雀門から一路南に走る朱雀大路は幅員二十八丈、それが南に盡きる所には宏壯な羅城門が大空を劃して建てられた。都の周圍にめぐらされた垣は厚さ六尺、その垣の内外には各一丈の溝さへ掘られる。かくて朱雀大路を界として都を左京・右京に分ち、廣袤實に東西千五百八丈・南北千七百五十三丈、その規模に於て奈良の都の比ではない。

一路南に走る大空を劃して

皇居の造營もどんゝ工が進んで、賀茂川・大堰川には筏に組んだ材木が水面も見えないほど澤山浮び、役夫どもは「えいやゝ」の掛聲勇ましく、綱をつけてそれを曳き上げ、牛車に積みこんで、新裝の成つた大路を狹しと運ん

大堰川 保津川が京都市の西端嵐山の下を流れるあたりの稱。末は淀川となる。

新裝の成つた大路を狹しと

で行く。片肌ぬいで扇をうち振りながら高らかに音頭をとる翁、足を踏まれて鳴きわめく犬、兩手をあげて囃す童たち、――それ等の物音が山々にこだまして、すべては心もそゞろに浮き立つやうな眺であつた。

翌十三年の六月には、都の設備もほゞ整つたので、諸國から役夫五千人を徵して、この新都を掃き淨めさせ、七月一日になると、長岡の都の東西の市をここに移し、また店舍を造つ

平安神宮（大極殿模造建築）

て人々を住ましめられた。親王・公卿以下の邸宅も續々と建て連ねられたことはいふまでもない。

かくて桓武天皇がいよ〳〵長岡からこの地に遷幸遊ばされたのは、その年の十月二十二日。新都の山も川も草木までも無上の喜にをのゝいたに違ひない。天皇には遷幸の後間もない十一月八日、次のやうに詔せられた。

「この國山河襟帶、自然に城をなす。この形勢によつて新號を制すべし。宜しく山背國を改めて山城國となすべし。また子來の民、謳歌の輩、異口同辭に號して平安京といふ。今宜しくこれに從ふべし」。

めぐりめぐつて流れる

襟のやうに四周を取卷いた山、帶のやうにめぐりめぐつて流れる川、――さうした自然が、どんなに麗しく天皇の御目に映つたことであらう。またその自然の中に造られた都が、どんなに長閑にも平安な氣分を天皇の御心に與へ奉つたことであらう。

誇り顔に威容を示してゐる

既に竣工した紫宸殿や清涼殿などは、壯麗な姿を大空高く浮び出させ、なほ造營中の大極殿は、高さ六尺の石の壇上に、東西十九丈八尺・南北七丈四尺の敷地をもつて、蒼龍樓・白虎樓を左右に連ね、その比するものなき規模の大を誇り顔に、早くも堂々たる威容を示してゐる。

あの淋しかつた宇太村は、ここに千餘年の帝都として蘇つた。平安朝の歴史の幕は華やかに開いたのである。

〔禁轉載〕

高村光太郎（たかむらこうたろう）
彫刻家、詩人、東京市の人、明治十六年生。

三里塚
千葉縣印旛郡遠山村の内で、御料牧場になつてゐる。また櫻の名所。

天地二つの風景

二　春駒

高村光太郎

三里塚の春は大きいよ。
見はてのつかない御料牧場にうつすり
もうあさ綠の絨毯を敷きつめてしまひ、
雨ならけむるし、露ならひかるし、
明方かけて一面に立ちこめる杉の匂に、
しつとり掃除の出來た天地二つの風景の中へ、
春が置くのは生きてゐる本物の春駒だ。
すつかり裸の野のけものの清淨さは、野性さは、
愛くるしさは、

荻原井泉水（をぎはらせいせんすい）
名は藤吉、俳人、東京市の人、明治十七年生。

うひ〳〵しい

あゝ鬣（たてがみ）に毛臭い生きものの香を靡かせて、
たゞ一心に草を食ふ。
かすむ地平にきら〳〵するのは、
尾を振りみだしてまた駈ける
あの栗毛の三歳だらう。
のびやかな、すなほな、うひ〳〵しい、
高らかにも荒つぽい
三里塚の春は大きいよ。

（現代詩人全集）

三　お遍路さん

荻原井泉水

りん〳〵といふ冴えた音が、遙か山裾からこの山莊に

まで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。

「お遍路さん」とは、何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八箇所に殘された弘法大師の靈場を遍歷して歩くのがお遍路さんである。しかし、いかに信仰のためとはいへ、四國を一周することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として大抵の事ではないので、四國の代りにこの小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積むことが出來るとされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では、六七日かゝるといふことである。岡山から、もしくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄港に着く。

弘法大師　空海。弘法大師は諡號である。平安時代初期の高僧で、我が國眞言宗の開祖。承和元年寂、年六十二。

小豆島　瀨戸内海にあり、香川縣に屬する。

功德を積む

土庄　小豆島の西南端にある町。

そこから發足して、第何番といふ札所の順に參詣の路をたどるのである。菅笠をかぶり、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、少いのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の路をたどつて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりん

お遍路さん

繪である

りんといふ冱えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのにいい氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃一番多く見受けるといふことだ。この頃島に着く船は日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。

信念を篤くする

一體、遍路といふものが、いつの時代から始まつたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信念を篤くする上からいつても、よいことだと思ふ。それぱかりではない。お遍路さんは到る所で愛される。また惠まれる。お遍路さん同士もまたお互に遍路である

お互に遍路であるといふことのために信頼する

といふことのために信頼する。また扶助する。これが實によいことだと思ふ。未知の人たちが道づれになつて親しんでゆく。路を教へあひ、足らぬ物を足しあつてゆく。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預かつてくれる。決して紛失しないといふことだ。

一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識

これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參ずるには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも娘でも、男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することが出來るのだ。「南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出て來るのだ。これは實に

この道に參ずるいらない

信じあふことに生きる

美しいことだ。爭鬪と欺瞞とに滿ちたこの社會の中にあつて、信賴と扶助とに心をあはせてゆくことの出來るほど美しいことが他にあるだらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない。彼等が愛しあひ、信じあふことに生きるが故に美しいのである。

そしてこのことは、獨り彼等お遍路さんの上のことのみではない。私たちは皆人生の遍路である。銘々にみづから負はねばならぬものを負うて、自分の名を書いた札をまき散らしながら、自分々々の路を遍歷してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信賴と扶助とが行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私た

學ばねばならない

お遍路さんの心を心とする

人生を歩く

楠山正雄（くすやままさお）
作家、飜譯家、東京市の人、明治十七年生。

いぢけて歡ばしいうるほひとくつろぎ

ちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事をのこした弘法大師の暗示を感じなければならない。そして人間の悉くが、お遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私たちはまづお遍路さんの信と愛とをもつて、人生を歩きたいものであると。

（山水巡禮）

四　春の大和路

楠山正雄

一　早春の奈良

「奈良のお水取（みづとり）が近くなつた。春が近くなつた」と京の人はいひます。久しい冬ごもりの炬燵（こたつ）ずまひでいぢけてゐた人々の心に、歡ばしいうるほひとくつろぎを、この「お水

取」といふ言葉が不思議と持つて來てくれるのです。その心持を、私は上方に住んでみて、始めて味はひました。

三月十二日、春の彼岸會の前七八日、東大寺の二月堂のお水取の夜には、そこの閼伽井に、遙か北の若狹國から水が流れて來るといひます。それを汲んで、み佛の香水に供へるのです。深い地下の水脈をたどつて、一條の清水が通ずるといふ、この早春らしい聯想をもつ傳說が、冬に閉ぢられ

お水取

東大寺
華嚴宗の大本山、聖武天皇の勅願寺。

若狹國
福井縣。

た人々の氣分を、どのくらゐ爽かにするか、それは武藏野のやうな平野に育つた者の知らないことです。

奈良の古都らしい靜かな情趣を味はふにも、このお水取の頃が一番いいやうです。風は少し寒いが、芝生はほろ〳〵と乾いてゐるが、一皮むけば、下にはほつこりと溫かい土のいきれが立つてゐます。青いものの芽が出かけてゐます。常綠樹の多い周圍の丘陵にも、冬枯の

奈良の春

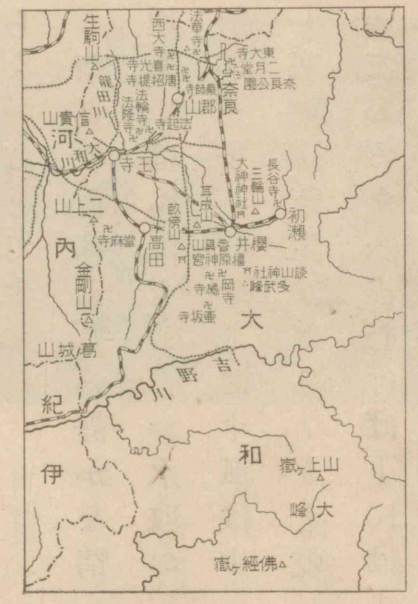
間近い春の輝きを豫告する

離々として

春が……行樂の群をつれてやつて來ます

否

あとらしい荒涼さはなくて、却つてもう間近い春の輝きを豫告するやうなうるみがあります。雪どけした澤地の離々として僅かに青い春草の中に、雪のやうに白い馬酔木の花の點々と數へられるのもこの頃です。



大和路略圖

つて來ます。奈良の全市を、否、大和國をあげて、大きな遊園地として開放されます。とりわけ四月・五月の奈良公園と

飛鳥山　東京市王子區王子町にあり、櫻の名所。

あわたゞしい

心の中に融けこんでゆく

いつたら、それこそ東京の飛鳥山と上野の花見を一つに取りこんだ熱鬧です。それに、奈良はぢき日の強くなる所で、春から夏の移りかはりが、おそろしくあわたゞしい。四月の末には、咲き殘つた櫻の梢の中で蟬がじい〳〵と鳴いてゐます。

二　西の京

さうはいつても、日こそ暑いが、四五月の大和めぐりは誰にもすゝめたいと思ひます。麥畑の輕い埃を浴びながら、頭の上の空に雲雀の歌を聞いて、明るい日向の野道を心まかせに歩いて行くうちに、古い歴史と傳説が、初夏の光のやうに優しく心の中に融けこんでゆくあの伸びや

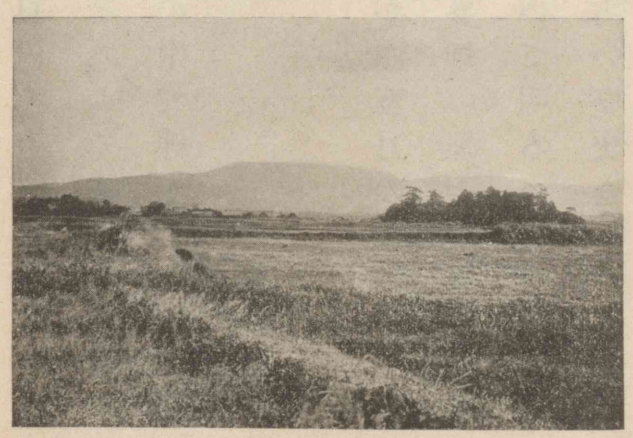
かな心持といつたらありません。

奈良公園を西に二三町離れると、そこは昔の平城京の東京極で、現在の公園は、いはばその東郊に當つてゐるのです。古への朱雀大路は、畑の間に狹められ、平城内裏址の礎石を中に挿んで、昔、東大寺と東西相對した西大寺、それからこれも總國分尼寺として榮えた法華寺が、規模こそちがへ、今ももとの寺址に立つてゐます。

東京極　平城京の東極端の大路。

西大寺　眞言律宗の大本山、孝謙天皇の勅願寺。

法華寺　眞言律宗、光明皇后の御創建。



平城内裏址

南を望めば、まばらな松林をとほして藥師寺の三重の塔が見え、平城内裏の朝集殿をそのまゝ保存したといはれる唐招提寺の伽藍も近く、菅公の出身した地の菅原の里には、喜光寺があります。これ等を總稱して、西の京の寺々といひます。

三　斑鳩

「大和路や雲雀落ちこむ塔の蔭」西の京を出はづれて、郡山の町を拔け、二里ほど行くと、そこはもう昔、斑鳩の里と呼ば

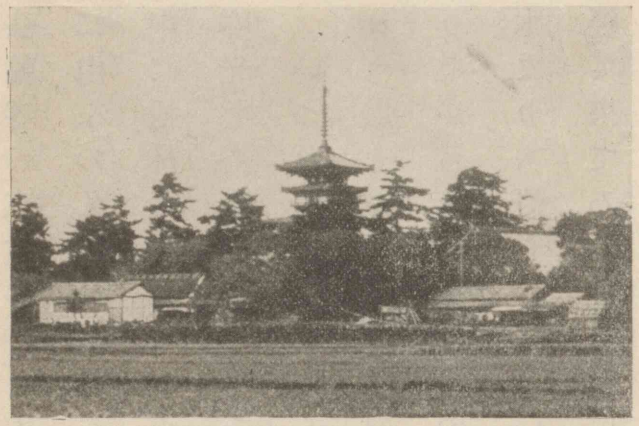
藥師寺　法相宗の大本山、天武天皇の勅願寺。

朝集殿　大極殿で大典擧行の際、百官が參り集まつて待つてゐる所。

唐招提寺　律宗の本山、天平寶字中、唐僧鑑眞の創建。

喜光寺　法相宗、養老中、僧行基の創建。

大和路や云々　巖谷小波の句。



藥師寺の塔

法隆寺　法相宗の大本山、聖德太子の御創建。
法起寺　法相宗、聖德太子の御創建。
法輪寺　眞言宗東寺派、聖德太子の御創建。子山背大兄王の御創建。
日本の古史に由來の久しい

自然の造化

れた聖德太子時代の聖地です。法隆寺の五重の塔、法起寺・法輪寺の三重の塔、日本の古史に由來の久しい古塔が、麥畑の中に、松林の中に、千三百年來の春光を浴びて立つてゐます。

いづれも人工で作られた、それも燃えやすい木造建築でありながら、そこらの山のどの樹木よりも恐らく久しい年月を經て來てゐることを思ふと、人間の文化の、時に自然の造化よりも悠久なもののあることを思はずにはゐられません。

法隆寺

嵐ふく云々　「嵐ふく三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり」（能因法師、後拾遺集）
三室の山　神南備山ともいひ、奈良縣龍田町にあり、龍田川の西岸に當る。
大和川　源を奈良盆地に發し、西流して大阪灣に注ぐ。
中將姫　右大臣藤原豐成の女。聖武天皇に仕へたが、後、當麻寺に入つて尼となり、蓮絲の曼陀羅を織つた。寶龜六年寂、年二十九。
當麻寺　眞言・淨土兩宗、用明天皇の皇子麻呂子王の御創建。

四　春の大和路

「嵐ふく三室の山の」と詠まれた紅葉の名所の龍田川も、法隆寺から半里餘りの路で、田間の細流に過ぎなかつたものが、この邊から急に大きくなり、王寺町の近くで大和川に合流してゐます。

四　南大和の山々

生駒・信貴に起つて、奈良盆地を西に劃る葛城山彙も、中將姫の昔話で名高い當麻寺の塔を懷に抱く二上山から更に南に金剛山まで迫つて來ると、山も高くなり、峻しくもなります。大峰山上が嶽・佛經が嶽等、千古斧を入れないといふ原始のまゝの森林が深く、いつも雲霧が立ちこめ

頓に

神祕の感じ

巴蜀　支那四川省地方の稱。

四代　後醍醐・後村上・長慶・後龜山の四天皇の朝。

三國　支那漢末に起つた蜀・吳・魏をいふ。

蜀漢を想ふ　蜀漢の王の劉備が巴蜀に據り、諸葛孔明を擧用して二代四十三年を保つたことを指す。

て、無氣味らしい吉野山彙と東西相對して、地勢が頓に平凡でなくなります。神祕の感じも起るでせう。何といつても南大和は近畿の巴蜀で、吉野朝の天皇があの中にはひられて、四代五十餘年の正統をお保ちになつたことは、恐多い例ながら、支那の三國の蜀漢を想はせられるのです。

吉野

五　飛鳥の古京

それに比べては、高田・畝傍から櫻井・初瀨へ横に引いた

上代文化の搖籃

平野に照りとほつた明るい日の輝き

平和な生活を反映してゐる

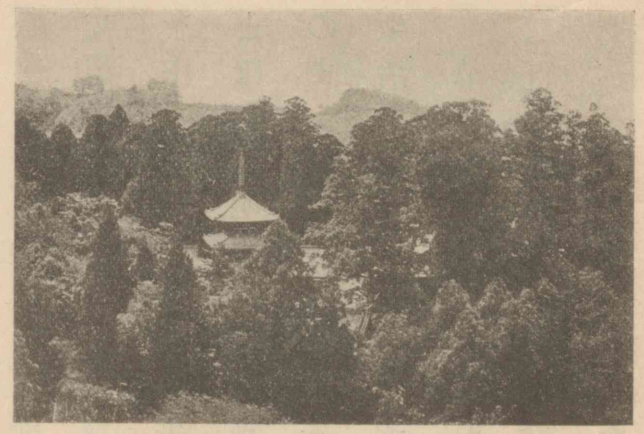
一本の鐵道線の南北に當る中部大和、神武天皇の御卽位禮を擧げさせられた橿原や、上代文化の搖籃であつた飛鳥の古京を中心とする小さい平野に照りとほつた明るい日の輝きこそ、そのまゝに私たちの祖先の平和な生活を反映してゐるやうです。

畝傍・耳成・香具山、どれもこれも二百メートルに足らない丘陵ですが、その外、これに似たいくつかの小丘が到るところにあつて、大和の國原を見晴す展望

飛鳥の古京

橘寺　天台宗、本名は上宮院菩提寺、聖德太子の御創建。
岡寺　新義眞言宗、本名は龍蓋寺、天智天皇の二年、僧義淵の創建。
壺坂寺　新義眞言宗、本名は南法華寺、大寶三年、僧辨基の創建。
談山神社　別格官幣社。
吉野・初瀨の云々　「來て見れば　ここも櫻の峰つゞき吉野〻　初瀨の花の中宿」（伴蒿蹊）
長谷寺　新義眞言宗豐山派の本山、養老五年、僧道明の創建。

臺、いはゆる國見の丘になつてゐます。橘寺・岡寺・壺坂寺、皆さういふ丘の上に見晴しよく建てられてゐます。甲の寺に參れば、乙の寺が見え、丙の寺に上れば、甲・乙ともに見えます。その中でやゝ山深く奥まつて、櫻と紅葉の名所として聞える多武峰に藤原鎌足を祀る談山神社があります。いはゆる「吉野・初瀨の花の中宿」で、櫻と牡丹で名高い長谷寺のある初瀨町も、ここから遠くはないのです。


壺坂寺

見るから神々しい
大神神社　官幣大社。齋かれる

初瀨を出て、北に向つて、もとの奈良へもどると、これで大和盆地を一めぐりしたことになります。

その途中、汽車の窓から見える東の山續きの中に、一際深い杉の木立に蔽はれて、見るから神々しい山が、我が國最古の神社といはれる大神神社の齋かれる三輪山です。山が直ちに神體であるこの社には、二つの神門と、たゞ一つの簡素な拜殿とがあるだけで、すべてが太古の自然をそのまゝの趣です。

ここまで來て、大和が日本の古國、さうして日本が世界の最舊帝國であることを、どんな旅行者でもつくづく思はないものはないのです。

〔禁轉載〕

五　徳川吉宗の寛仁

菊池寛

菊池寛、香川縣の人、明治二十一年生。

一

春の盛りであつた。千代田城の櫻は去年よりもつと見事に咲き亂れてゐた。徳川八代將軍吉宗公は花を見ながら、夕食を召しあがつてゐた。膳についてゐた木芽田樂が、この上なく好味だつた。

「これは殊の外よい味ぢや。」

公は近習の野村筑前守にさういはれた。

「御膳番のものが喜びますでございませう。」

筑前守はさう御挨拶申し上げた。

「明日も食べたいものぢやな。」

「おやすい御用でございます。さやう申しつけますでございませう。」

筑前守はその夜、御膳番の依田半次郎を呼び出して、田樂を明日も調進するやう申しつけた。

徳川吉宗

ところが、翌日の夕食の膳部が吉宗公の前に差上げられたのを見ると、木芽田樂は影も形もないのだつた。

筑前守は心配になつた。彼は所用があるやうな顔をし

はづす

て席をはづすと、御臺所へ行つて依田半次郎を責めた。

愕然として色を失つた

依田はそれを聞くと、愕然として色を失つた。彼は、はたと失念してゐたのである。彼は御用の豆腐屋へ急使を差出して、豆腐を取寄せると、必死になつて調理を急いだ。もし御食事の間に合はなかつたら、依田は申譯が立たないのであつた。切腹とまではゆかないにしろ、御役御免は定であつた。

必死になつて

定であつた

だが、田樂が調理されて、御膳に差出された時は、吉宗公はもう食事を終へられてゐた。そして食後のお湯を召しあがつてゐた。

御給仕のものは恐る〳〵田樂を差出した。そして御膳番の失念をお詫び申し上げた。

公はそれを何氣なく聞き流されてゐたが、

「うむ、田樂か。それならば、酒をもう一獻過さうか」

さう仰せられて、田樂を御賞味になつた。

「うむ、昨日にも劣らず、よい味ぢや。ほめて遣はせ」と仰せられた。御諚を聞くと、筑前守は、はつと平伏して、

「御言葉で武士一人すたらずに濟み申しました」と申し上げた。

武士一人すたらずに濟む

吉宗公はそれには何ともお答がなかつた。

御臺所で依田が、感涙にむせんで喜んだのは勿論である。

感涙にむせんで

戸田　今の埼玉縣北足立郡戸田村。
上板橋　今、東京市板橋區。

有難い上意

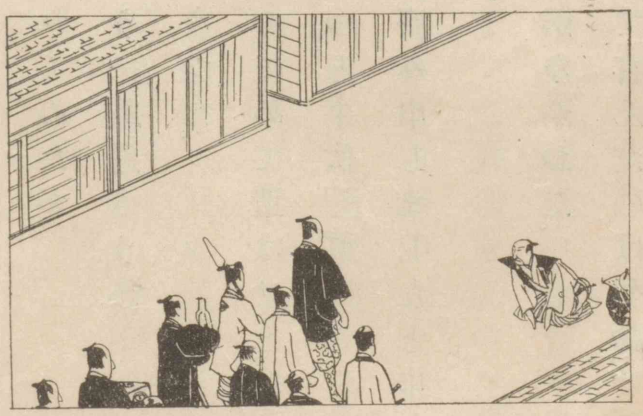
二

また或年四月上旬のことであつた。戸田あたりへ鷹野に御成になり、上板橋を通つてをられた時、土地の代官柴村藤右衞門といふものがお出迎へした。

「よい天氣ぢやが、麥の出來はどうぢや。」とお尋ねになつた。藤右衞門は有難い上意に感激して、

「近年になき豐年でございます。」

とお答へ申し上げた。



麥の出來はどうぢや（小村雪岱筆）

御感斜ならず

上々の面目を施して

夏成年貢　江戸時代に關東で夏に納めた畑年貢。

すると吉宗公は御機嫌よく、

「百姓どももさぞ喜びをるならん。だが、そちの支配の外、隣國はどうぢや。」とお尋ねになつた。

「當年はいづくもおしなべて大豐年の樣子に承ります。」と申し上げた。

公は御感斜ならず、藤右衞門はよく物を申すものなりと御賞美になつたので、藤右衞門は上々の面目を施して、羨まぬものはないほどだつた。

然るに初夏になつてみると、麥は近年にない大不作だつた。そして百姓たちは多くは夏成年貢を納めることが出來なかつた。藤右衞門は仕方なく、その事を勘定奉行神

厚き上意を蒙る
手の裏を返すやうなこと
武士の一分立つか
上聞に達する

尾若狭守にまで上申した。若狭守が憤慨したのは當然である。

「そこ許は四月中御成先で厚き上意を蒙りし節、近年になき豐年とお答へしたではないか。然るにまだ一月も經つか經たないかに凶年、年貢不納などと手の裏を返すやうなことを申し上げて、武士の一分立つか」といふのであつた。

藤右衞門は無論一言の返す言葉もなかつた。勘定奉行からその事が老中へ申達され、老中から上聞に達することになつた。藤右衞門は勿論死を覺悟してゐた。

しかし公は老中から藤右衞門のことを聽くと卽座に、

時の挨拶
當座の機轉

「それは藤右衞門の不調法ではない。予が氣晴しに鷹野に出でしをりなれば、麥作惡しと申しなば、予が心を痛めて、その日の慰みを失はんことを怖れて、他國までも豐年と申せしならん。予まことに麥作の景況を聽かんと思はば、呼んで聽くべきに、鷹野先にて聽きしは、時の挨拶なり。彼の返事も時の挨拶にて、當座の機轉ではないか。『よい天氣でございます。』と家來のものが挨拶を申せしに、午過ぐる頃より雨降りたりとて、その家來を咎むべきや。藤右衞門の返答は、時にとりての挨拶なり。咎むな、咎むな。」と仰せられた。

吉宗將軍は江戸時代を通じての名君である。特に自分

人情の微を察する
人間的な過失
涙のある

志賀直哉（しがなほや）
作家、宮城縣の人、明治十六年生。

が昔のいかなる名君・名將よりも感心する點は、そのいかにも人間的なところである。よく人情の微を察し、よく人間的な過失を許す點に於て、古今の名君であると思ふ。公ほどに物のわかりのいい、涙のある名君が、公以外古來幾人あつただらう。

（修養全集）

六　山の木と大鋸（おが）

志賀直哉

蟲が恐しかつた。小鳥の嘴が恐しかつた。

若芽は延びた。

今度はナイフが恐しかつた。枝を切りに來る人がじろじろとその邊を見廻しながら通つて行つた。

木は漸く太くなつた。

小鳥が蟲を探しによく來てとまる。今は小鳥は愛らしくなつた。

しかし鉈が恐しい。木樵が通る。あの腰の鉈でぽん〳〵と二度たゝかれゝば、自分は胴切にされる。早く太くなりたい。

かう思つてゐるうちにまた少し太くなつた。鉈は大して恐しくなくなつた。

しかし鋸（コギリ）が恐しい。早く大きくなりたい。しかし急ぐと危い。細いまゝで延びると、風に吹き折られる。

蟲や小鳥を恐れてゐた若芽からは三十年經つた。あと

百年經たねば、鋸を全く恐れない自分にはなれない。

或日杖を取りに來た男が、ナイフで自分の肌に年月と姓名とを彫りつけた。消えないやうにと出來るだけ深く彫りつけて行つた。自分は微笑した。しかしこんな字が肌に殘つてゐるうちは安心出來ない。この彫つた人間が年寄になつて死んで、その孫がまた年寄になつて死ぬ時代が來なければ安心出來ない。出來るだけ地から精分を吸はねばならぬ。出來るだけ太陽の光を受けねばならぬ。そして出來るだけ延びて、出來るだけ太くならう。

百年過ぎた。

もういけないと思ふやうな嵐に何十度か出會つた。南へ延び過ぎた大きい枝を一本折られたが、幸に命にかゝはるほどの傷は受けなかつた。嵐は憎らしい。自分は大きい枝を折られた時には隨分腹を立てた。しかし成長以外一分一厘自身を動かすことの出來ない自分を、その暴力に對し出來るだけ抵抗の少い姿勢にしてくれるものも、やはり嵐自身の力だと思ふと、嵐に惡意はないといふ氣がして、今は憎めなくなつた。ともかくもう安心だ。

かゝはる

抵抗の少い姿勢

官林拂下げの引渡しに役人と願ひ人とが來た。

木は何だらうと思つて、上から見おろしてゐた。

彼と同年配の隣の木が、

「何しに來たんだらう。」と彼に聲をかけた。
「小さい木がびく〳〵してゐるぢやないか。」
「早く行つてしまはないかな。」
「おい〳〵、君の根つこへ立つて、僕を見上げながら何かいつてゐるよ。」
「氣味の悪い奴だな。」
「心配はないよ。」
「おや、おれの足を何かでたゝいてゐるぞ。」
「うん、鉈で皮を剝いでゐるんだ。」
「しやうのない奴だな。」
「矢立を出して何か番號をつけてゐる。」

しやうのない

「氣味が悪いなあ。」
「あゝ歩きだした、歩きだした。」
「今晩吹降りでもあると、消してくれるんだがなあ。氣持が悪くてしやうがない。」
「なに、何でもないよ。見給へ、大分向ふの方の連中も番號をつけられてゐるぢやないか。」
「さうだね。だが、どうして君はつけられなかつたらう。」かういつて隣の木は羨ましさうに彼を顧みた。

一週間經つた。一人の勞働者がその森にはひつて來た。暫くその邊を見廻して、いい場所に地ならしをはじめた。

その邊の小さい木を鉈で切りはじめた。どこからか熊笹を澤山切つて來た。そして三日ほどかゝつて、そこに小さな小屋を建てた。また三日ほどすると、石と泥とで、上の圓い、小屋ほどの竈を作つた。願ひ人がそれを見に來た。

「おれはこの木もはひるつもりだつたが、役人はここまでだといひ張つたよ」。

「これかね」と勞働者は、のみさしの煙管の雁首で、番號をつけられずに濟んだ彼を指した。

彼はその時、何か知らず身ぶるひを感じた。

「それさ」。

「何、わかるものかね。ついでに切つてしまはうよ」。

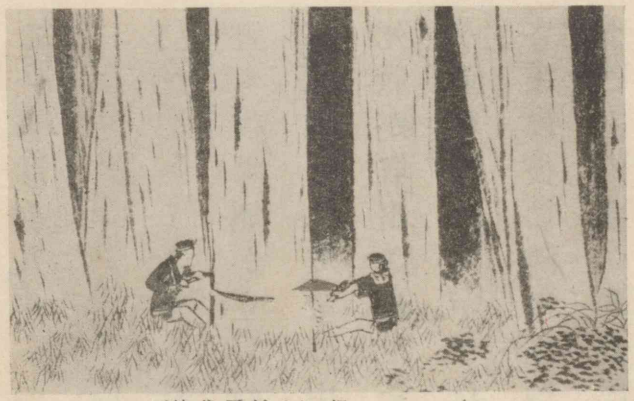
切つてしまはう。

「まあ、よせ〳〵。それ一本で、盜伐で訴へられるとつまらない」と願ひ人がいつた。

だん〳〵に大きな木が切り倒されていつた。竈からは晝も夜も煙が立ちのぼつた。それが立ちのぼらなくなると、二三日してその中から眞黑になつたきれ〴〵な木の死骸が取出された。それは一まとめにされては、わきに積み重ねられていつた。

遂に彼の隣に立つてゐた木が切られだした。それは見たことのない非常に大きな鋸だつた。一間ほどの長さで、その兩端に柄がついてゐた。腰をおろした二人が、足を根

に踏ん張りながら、それをひいた。ずつ〳〵、ずつ〳〵と靜かに切り進む。その休ない靜かな進行は、その木の死を一層不可抗なものに思はせた。切り口には三四本の環鐵のはまつた樫の楔が差してある。勞働者は時々立つて大きな斧の尻で楔を打ちこんだ。こーん〳〵といふ音は山に響きわたつた。



大鋸（小村雪岱筆）

彼の友は從容として一言も口を利かなかつた。彼は嚴肅な感じに打たれた。

從容として

嚴肅な感じに打たれた

幹は一分傾いた。勞働者は起ちあがつて、靜かにその場を離れた。うめきと共に木は倒れていつた。どーんといふ烈しい地響がした。その邊の小さい木や草が、あふりを受けて一度に靡いた。そしてなほ暫くはざわ〳〵と騷いだ。

それから二月ほどすると、拂ひ下げられただけの木は炭になり、或ものは用材、または燃し木として少しづつ勞働者のために運ばれて行つた。その邊一帶は廣々と明るくなつた。小さい木等は不意に日光の直射を受けて、歡喜の聲をあげて騷いだ。日向では暮せない羊齒類はだんだんに赤く枯れはじめた。

あふりを受けて

歡喜の聲をあげて

切株が並んでゐる。彼はそれを眺めながら、淋しい氣持になつた。彼には今まで自分のした努力が、これだけで終るものならといふ感情も起つた。最初蟲や小鳥が恐しかつた時代から、ナイフ・鉈・鋸と、それ等が一つ〳〵恐しいものとして彼の前にあらはれて來たことを思つた。小鳥を恐れてゐた時には、ナイフを知らなかつたことを思つた。そしてナイフを知つて恐れだした時には、その上に鉈のあることは考へなかつたことを思つた。鉈の上には鋸があつた。そしてすべてを通過したと思つた時に、彼はまた更に大鋸といふもののあることを知つた。彼にはもう根氣はなかつた。同時に不安も不滿もなくなつた。

徒勞に歸した

吉植庄亮（よしうゑしやうすけ）　歌人、千葉縣の人、明治十七年生。

新坂平　前橋市方面から赤城山に登る道にあり、外輪山の内側である。赤城山は群馬縣にある休火山。妙義・榛名と共に上州三山といはれる。

しかし彼は過去を顧みて徒勞に歸したその努力を悔いはしなかつた。徒勞といふ氣もしなかつた。彼には鋸を通過しようとしてゐた時代のあせる氣分は、今は全くなくなつた。そして同時に大鋸を知る前の少しだらけたやうな安心も今はなくなつた。それはいかにも淋しかつた。しかしその淋しさのうちに彼は或安定を得た。（荒絹）

吉植庄亮

七　赤城沼

新坂平（しんさかだひら）にたどり着いて、俄然景觀は一變した。見わたす限りの燃ゆる朱だ。たゞ一色の躑躅の花だ。既に黄昏深く、夕雲は私たちの頭を掠めんばかりに、しきりに飛來し、こ

そゝり立つ山　外輪山の諸峰である。

さびた色

花明り

の高原のはてにそゝり立つ山々は、深くその雲につゝまれてをり、雲のつゝみ餘した裾の傾斜から、廣い平一面、私の周圍まで悉く躑躅の花なのだ。それも悉く澁い、いはゆる赤城躑躅の朱だ。さびた色だ。雲のどこかに日は落ちつゝあるのだらう。ます〳〵暗がりゆくその雲の下に、躑躅の花は、あやかしの如く花明りして、いつまでもいつまでも暮れ入らうとしないのである。

赤城（若林侍郎筆）

花の群落

赤城大沼　赤城山頂にある火口原湖。

起きぬけに

頭に觸らうとする雲の下を、この花の群落の花明りを通り過ぎると、もうとつぷりと四邊は暮れはてて、道は若葉の樹林にはひつてしまつた。雲に濕つた土に、ほの白く點々と散つてゐる花らしいものはまだ見えたが、振仰ぐ若葉の梢には、全く花の姿は見えず、たゞ強烈な若葉の匂だ。

やがて三十分か小一時間も歩いたらうか、道は俄に下りとなつて、若葉の匂はいよ〳〵強烈になつたと思つたら、遙か下の方に灯が見えた。私たちの目あての赤城大沼の宿屋に行き着いたのである。

翌る朝は快晴であつた。起きぬけに飛び出して、湖畔の

すばらしい風景を滿喫してゐる

若葉の噴泉

清涼な日輪のしづく

島　大沼の中にある小鳥が島。

健脚を誇る

樹林から湖へと下つて行きながら、誰も口を利かずに、すばらしい風景を滿喫してゐる。私は美しい湖水に口そゝぎ、浴衣の片袖で、しづくの垂れる顏を拭ひ、そのまゝ新鮮な綠素のぶん〳〵匂ふ湖畔の大樹林に分け入つた。水楢・山毛欅・大楓の若葉の噴泉と、その噴泉の上にかゝつてゐる清涼な日輪のしづくである。

すてきにうまかつた朝飯の後に、私たちは小舟で島に遊び、更に別な躑躅の群落を見ようといふので、湖を左に見つゝ、湖畔の樹林を前へ〳〵と進んで行つた。いつまで行つても若葉の噴泉であり、その上にかゝつてゐる清涼な日輪である。をりしも日曜のことではあるし、健脚を誇

物いふ人魚の群をなす

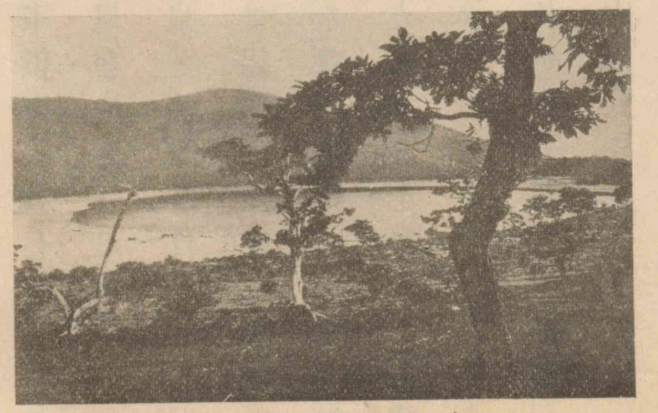
若葉の圓天井

高崎　群馬縣高崎市。赤城山の西南麓。

前橋　同縣前橋市。高崎市の東北に當る。

る都會少女たちが、紅い塗下駄の童女たちまでまじへて、若葉と日輪とのしづくにぬれて、到る所の樹林に、物いふ人魚の群をなしてゐた。日も高くなるにつれて、松蟬が若葉の圓天井の下で、靜かに合奏をかなでてをり、をりふし枝から枝に飛び移る姿が光となつた。

もう一つの宿屋の集落は、私たちの宿泊した場所の反對側の湖畔にあつた。どの宿も、どの食べもの屋も、高崎から、前橋か



赤城大沼

ら、或は私たちのやうに東京からやつて來たらうと思はれる人たちで一杯で、沖の方には、子供を滿載した白塗のランチが輕快に走つてゐるのが見られた。

この綠素の瀰漫した、若葉の噴泉と清涼な日光の溢れてゐる原始樹林と、山上湖と、そして銀座から、或は淺草からすぐ運ばれたと思はれるやうな、都會風俗の人たち、わけても洋裝の少女たちとの對照と調和とを、私は不思議な見ものとして眺めたのである。

それにしても、この都會群衆のおしやべりも、歡語も、一切のみこんで靜まり立つてゐる山の大きさよ。

ランチ　小蒸氣船。

銀座　東京市京橋區。

淺草　同淺草區。銀座も淺草も共に東京市の屈指の賑やかな所。

八　君が代の歌

芳賀矢一

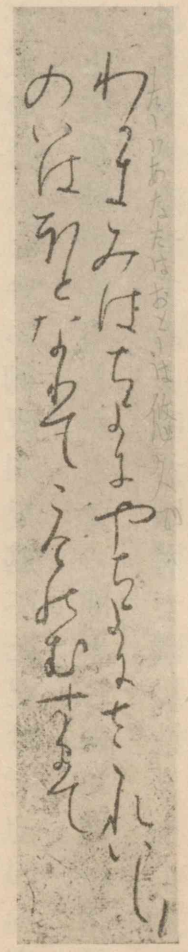
日本の國歌は三十餘文字の短歌「君が代」である。これほど短い國歌は、どこの國にもない。形の短いばかりでなく、「君が代の長久」といふ御祝詞を述べただけで、その內容もまことに單純である。しかし、この簡單、この單純が、諸外國とは全く異なつてゐる我が國體と國民性とを、十分に說明してゐるのである。

日本の皇室は開闢以來の皇室である。この日本の國土は、我が皇室の君臨まします所と神代の昔から定まつてゐて、皇室と國土とは決して離れないのである。外國の皇

芳賀矢一　國文學者、文學博士、福井市の人、昭和二年歿、年六十一。

開闢以來

室にはさういふ例は一つもない。もと普通の國民の中から、或は德望により、或に權力により、次第に成りあがつて王となり、帝となつたのであるから、歷史よりは皆ずつと新しい皇室である。國土はそのまゝで、皇室は幾度も變つたのである。それ故、國民の心にも、國土と皇室とを一つにして考へることは出來ない。皇室卽ち國家とは考へないのである。



挿畫の和歌は「古今集」卷七に見える詠人不知の歌で、「和漢朗詠集」にも收められ、國歌「君が代」の本となつたものである。

傳藤原行成筆
和漢朗詠集より

かういふわけ故、外國の國歌では、どうしても國土や國家の事を歌はなければ滿足が出來ない。皇室の御繁榮を歌つただけでは物足らないのである。日本では、皇室の御繁榮は卽ち國家の繁榮であるから、皇室の御繁榮を歌ふだけで十分である。短い「君が代」の歌は、皇室の御繁榮を歌ふと同時に、國家の繁榮をも含んでゐるのは勿論である。

事新しくいふまでもない

「君が代」の歌に現れた思想、天皇の御代の長久を祈るといふことは、日本の上代から種々の文學にも現れてゐて、事新しくいふまでもない。皇室におかせられても國民をおいつくしみになつて、皇室と國民との間に爭の起つたといふことは昔から絕えてない。皇室の御繁榮は卽ち國民の繁榮幸福であるといふことが、日本人の信念である。

日本人の信念

本野久子（もとの ひさこ）
愛國婦人會會長、東京市の人、明治元年生。

それ故、別段に國民の繁榮や幸福を歌ふ必要はない。短い「君が代」の歌には、國家の繁榮と共に、國民の繁榮幸福もおのづから含まれて歌はれてゐるのである。

九　奥村五百子

本野久子

七八歳の少女が先生の前で半紙をひろげてゐる。壽（ことぶき）の字の清書である。少女は墨をたつぷり含ませた筆でのびのびと書いてゆく。見てゐる先生は、これでうまくをさまるかと思ふ。すると少女は、最後の點を紙から離して机の上にちよんと打つた。先生は驚いて、「どうしてそんなことをするのか」と尋ねると、少女は、「でも、字はちゞこまらない

昂然としてゐる

長州　長門國。山口縣。

誰何する　防長　周防と長門。周防も山口縣。

うら若い

唐津　今の佐賀縣唐津市。

寺　高德寺。父は同寺の住職奥村了寛。

やうに書かねばなりませんから」と答へて昂然としてゐる。これが少女時代の奥村五百子（いほこ）の姿であつた。

義經袴に朱鞘（ざや）の大小を佩び、深編笠をかぶつた壯士風の若者が長州の濱へあがつて來た。拔身の槍を持つて海岸警備に當つてゐた武士たちが四方から取圍み、嚴しく誰何すると、若者は悠々と笠をぬぎながら、「防長には眞の男子がゐないと見える。女一人がさまで恐しいのか」といつて大笑した。見れば、まだうら若い女子である。これが、勤王の志を抱く父を援けて、維新の國事に奔走しはじめた青春時代の五百子の姿であつた。

五百子の生家は、肥前唐津の由緒深く格式高い寺であ

つた。父は嚴格と仁慈とを併せ具へた高僧であり、その上、五百子の兄と共に熱心な勤王論者で、維新に際しては、蔭ながら一通りならぬ力を盡した人である。母はまた日本婦人として最も典型的な立派な資性をもつてゐた。五百子が後になつて、高潔な精神と堅忍不拔の意志とをもつて大きい仕事を成し遂げることが出來たのも、かういふ兩親の血を承け、その教育を受けたことによるところが少くないのである。

明治三十三年、北清事變が起ると、五百子は日本軍慰問のため、その年の秋北清へ渡つた。それまでも彼女は、視察や布教の目的で朝鮮または南清地方へ出かけ、そのたび

堅忍不拔の意志

動機を……與へた

荒れに荒れてゐた

か弱い

通州・北京の東方に當る町。

に男子も及ばないやうな働きを見せてゐたが、このたびの旅行は、愛國婦人會創立の動機を彼女に與へた、特に意義深いものであつた。

北清地方の道路は荒れに荒れてゐた。それでも馬車は通ずるが、車臺の動搖が激しいので、とても乘つて行くことが出來ず、五百子は、か弱い女の身で、たゞ一人杖にすがり、通州から北京まで五里の道を歩いたこともある。

奥村五百子

自分の身を顧みる暇はない

白河　天津を貫流して渤海に注ぐ河。

濛々と渦巻く砂塵を浴びて

黍がらの中わけゆくや唐の旅

五百子

そのあたりにとゞまつてゐた日本軍隊中に、「北京郊外の高粱畑の丘の上で『日本軍萬歳々々。』としきりに叫んでゐる日本婦人のばけ物を見た。」といふ話の傳はつたのは、この時であつた。

しかし五百子は、自分の身を顧みる暇はなかつた。彼女は、小さな船に乘つて白河を溯つた時、屍などの浮んでゐる赭土色の河水を、兵士が飲料にしたり、炊事に用ひたりしてゐるのを見た。ひどい炎天に、一滴の飲水も、一椀の糧食も持たない兵士が、濛々と渦巻く砂塵を浴びて、生の玉蜀黍をかじりながら進むのを見た。さういふ困苦のため

涙もろい

仁川　朝鮮京畿道の都會。

釜山　同慶尙南道の都會。

小松若宮　後の東伏見宮依仁親王。元帥海軍大將、大正十一年薨、御年五十六。

妃周子殿下は現に愛國婦人會總裁であらせられる。

に血を吐いて死ぬ兵士も數多く見た。そして、涙もろい五百子の胸は一杯になつた。こんなにまでして軍人が御國のために働いてゐるのに、婦人だけが安穩にしてゐるべきではないと思つたのである。

この大きな感動は、どうしても婦人の手で軍人の遺族救護事業を起さねばならないといふ決心を、はつきりと彼女に抱かせた。あわたゞしい歸朝の途次、彼女は早くも仁川で、この婦人に與へられた新しい任務を自覺させるための第一聲を揚げた。釜山でも同じ叫を繰返した。そして着京早々、小松若宮の御殿に伺候し、まのあたり見聞して來た日本軍の辛苦の有樣を逐一言上し、この際一大婦

人會を起して、軍人の遺族救護に當りたいと述べて、御賛同をいたゞき、更に閑院宮妃殿下の御賛同をも忝うしたので、彼女は勇躍して愛國婦人會設立の計畫を進めた。かくて翌三十四年の三月二日には、朝野の名士の援助の下に、いよ〳〵發會式を擧げることとなつた。式場は、九段の偕行社で、ゆかりの深い靖國神社の櫻の咲きそめるのに間もない頃であつた。

この日、五百子はみづから演壇に立ち、百六十餘名の會衆を前にして、戰地に於ける軍人の働きぶり、勞苦の模樣を具さに述べ、「かういふ風に身命を國家に捧げる人々があつてこそ、私どもは日本婦人の誇を高く持してゐられ

閑院宮妃殿下　閑院宮載仁親王殿下の妃智惠子殿下。

朝野の名士の援助の下に　九段　東京市麹町區。

偕行社　陸軍將校の集會したり、軍事の研究をしたりする所。

日本婦人の誇を高く持する

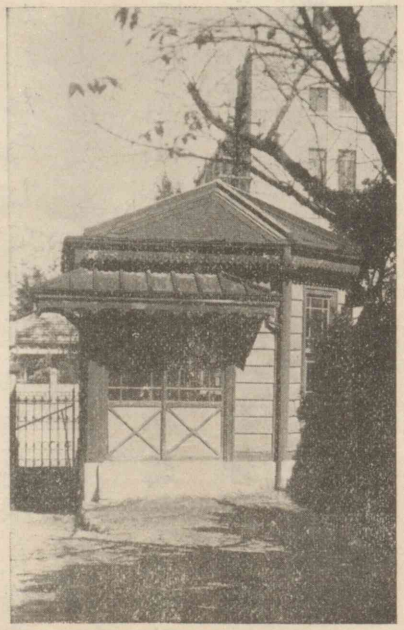
絶叫する

日本體育會　全國的に諸種の體育の指導をなす會で、現在は東京市品川區大井にある。

門衛所　門番のゐる所。

るのでありますぞ。どうか皆さん、半襟一掛を節約して下さい。その代を積み立てて、遺族を救ひ、戰死された兵士の魂を慰めませう。」と絶叫して、並みゐる會衆を泣かせた。

やがて九段坂下の日本體育會門衛所の一室に、會の事務所が設けられた。事務所とはいつても、石油罐の空箱を書類入とし、原稿紙の代りに反故を用ひるといふみすぼらしさであつた。それでも五百子は熱心にここに出勤しては事



創立當時の愛國婦人會事務所

かひ〴〵しい姿

眞心から迸り出る聲

眞價が發揮される

老軀を挺して東奔西走し

勞をねぎらふ

務を見、また草鞋がけのかひ〴〵しい姿で全國を遊說した。彼女の「半襟一掛を節約して下さい」といふ眞心から迸り出る聲は、田舍町の小學校の運動場でも聞かれた。山村の寺院の堂內でも聞かれた。そして彼女がまづ泣き、聽衆も泣いた。

かくて發會後數年にして日露戰爭が起ると、會の活動は急に目覺しくなり、その眞價もます〳〵發揮されたので、會員の數は非常な勢でふえて行つた。この間にあつて、五百子はなほも老軀を挺して東奔西走し、會のためにひたすら盡力を續けたが、終にはみづから渡滿して、百萬の將士の勞をねぎらひ、安んじて戰ふべきことを告げた。

行を終へて

後事を新進に託する

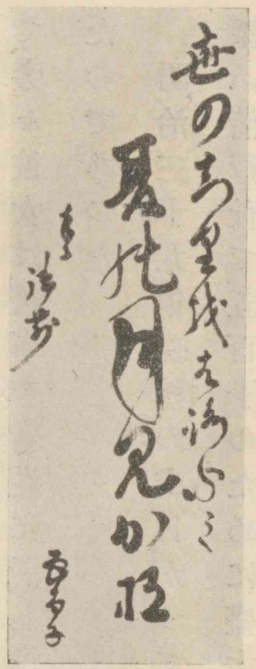
總裁宮殿下　當時の總裁宮は閑院宮妃智惠子殿下であらせられた。

しかし、この行を終へて歸朝した時には、さすがの五百子も、自分の體の漸く衰弱して來たことを痛感した。一方、會の方は、既に五十餘萬の會員を擁するまでになつたので、旁々彼女は、後事を新進に託し、潔く退隱すべく決心したのであつた。

明治三十九年、晩秋の或日、かつて發會式を擧げた思出深い偕行社で、五百子のために盛大な送別會が催され、總裁宮殿下も台臨遊ばされた。五百子はこの日、長年にわたるすべての勞苦や心痛を忘れ去つたかのやうに、心から晴々とした顏色を見せてゐた。そして殿下の御所望により、幾度か支那や滿洲に携へて行つた日の丸の軍扇を開

いて、謠曲「船辨慶」の一節を舞ひをさめた。實にこの日は、五百子の一生に於て、最も光榮に滿ちた時であつた。

かくて退隱の後は、專ら靜養に努めてゐたが、しかし老體は再びもとの健康にかへらず、翌明治四十年の二月七日、六十三歳をもつて、その奮鬪に終始した生涯の幕を閉ぢた。



五百子筆蹟

愛國婦人會は、現在では會員總數百五十萬に垂んとしてゐる。そして大正六年以後は、社會事業の方面にも大きな貢獻をなして來たが、近くは滿洲・上海の事變に當つて

船辨慶　源義經が兄頼朝と不和となり、西國に遁れようとして、海上で平知盛の亡靈に脅かされた時、辨慶が祈禱して、これを退けたことを綴つた謠曲。

世のちりをはらふ(う)て夏の月見かな　五百子

奉る御前（退隱に當り小笠原長生子に贈つたもの）

奮鬪に終始した生涯の幕を閉ぢた　垂んとする

も、傷病兵の慰安、戰歿軍人の遺族救護等に盡すところが實に甚大なものがあつた。

一〇　軍用犬クラウ

中根榮

一

歐洲戰亂が追々と酣になると共に、軍用犬の效果は次第に認められて來た。英國は軍用犬として訓練に堪へ得る犬を盛んに戰場に送るべく國民に告げた。

バーンスは、ロンドンの郊外リッチモンドの古城の一郭に堂々たる邸宅をもつ有名な銀行家の長子であるが、祖國愛に燃えた彼は、愛犬クラウと共に決然として出征

〔禁轉載〕

中根榮（なかねさかえ）　日本電報通信社員、岐阜縣の人、明治十四年生。

酣になる

リッチモンド　ロンドンの西郊。十四世紀頃の王城がある。

決然として出征軍に投じた

軍に投じたのであつた。

イープル市東方の高地を占領してゐたバーンスとクラウとの屬する聯隊は、獨軍のために

めちや〳〵にやられた。聯隊本部も殆ど全滅となつてしまつた。

旗手は聯隊旗をその旗竿から取りはづした。そしていかなる方法でこれを敵手から免れさせるべきかを焦慮したが、既にその時は、生き殘つてゐる者は、旗手自身とバーンスたち數名の下士卒に過ぎなかつた。

軍用犬

イープル　ベルギー西南部の町。

勝に乘じた獨軍は、海嘯のやうな勢で押寄せて來た。旗手はもうこれまでだと思つた。

「曹長つ。聯隊旗は僕が腹に卷いて後退する。僕が斃れたら、君が代つて腹に卷いて後退してくれ。」

旗手は聯隊旗を長く折り疊んで上衣の下にしつかりと卷きつけながらいつた。旅團司令部がどこにあるのか、師團司令部がどの方面にあるのか、戰線は混亂して全

海嘯のやうな勢で押寄せて來た

突撃

く見當がつかぬ。たゞ高地から下の方へ下りて、獨軍の攻撃から免れて退却して行けば、どこかの隊に合することが出來ようとの考で、旗手は高地の斜面をどん〳〵走り下つた。

二百メートルも行かぬうちに、砲彈の破片が旗手の體のどこかに命中した。旗手はばつたり倒れてしまつた。

「曹長つ。」

と旗手は叫んだ。

「ここ〳〵。」

と旗手は腹のあたりをたゝきながら、

「早く聯隊旗を取出して逃げよ。」

奮然と起つて

といつた。

曹長は手早く旗手の上衣のボタンをはづして、その中から聯隊旗を取出した。そして前に旗手がしたやうに彼も上衣の下にそれをしつかりと卷きつけた。旗手の負傷を心配してもじ〳〵してゐる曹長を叱るやうに旗手は、

「早く行けつ。」

とどなりつけた。

曹長は奮然と起つて駈けだした。バーンスもクラウも曹長について走つた。

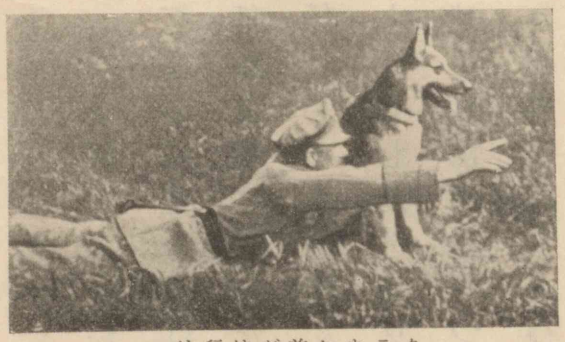
三百メートルほど走つた時、ひゅーつと音をたてて飛來した彈丸が、曹長の胸部に中つた。「あつ。」と叫んだかと思

ふと、彼は前のめりに倒れてしまつた。高地を占領した獨軍は、逃げて行くあはれな敗殘兵に、思ふまゝに砲火を浴びせかけてゐるやうであつた。

そこで今度は、バーンスが代つて聯隊旗を腹に卷いて逃げた。少し走つた所で、バーンスもまた銃彈のためにやられた。何か太い棒でなぐられたやうな氣持がしたかと思ふと、そのまゝばたりと倒れた。「僕もやられたな」とバーンスは自覺した。何くそと勇氣を奮ひ起して起ちあがらうとしたが、どうしても起ちあがれなかつた。クラウは悲しげな聲を出して、尾を後脚の間に卷きこんで、バーンスの半開の眼を眺めては、右へ廻つたり左へ廻つたりした。

辛うじて

バーンスの銃創は腹部にあつた。創口から眞黑な血潮が流れ出て、バーンスの上衣をべつとりと彩つた。クラウは微かに鳴聲を出しては、バーンスの顏をのぞきこんだ。バーンスは聯隊旗を何とか始末せねばならぬとあせつた。苦しい體を半ば起して、クラウを引寄せ、辛うじて腹部から取出した聯隊旗を、クラウの背負つてゐる背囊の中へ押しこんで、固く蓋をした。



クラウおゝ前だけ行けつ

「クラウお前だけ行けつ」。

心を……殘しながら

とバーンスはクラウを前に押しやつた。クラウは相變らず悲しい聲をたてて、彼の側を去らうとしなかつた。バーンスは、

「なぜ行かぬか。お前の背には光榮ある聯隊旗がはひつてゐるのだ。お前はそれを身方の軍へ送り屆ける重大な任務を與へられたのだ。軍用犬としてこれ以上光榮ある任務があるか。早く行けつ」。

と命令した。クラウは心をバーンスに殘しながら、終に命ぜられた通りまつすぐに走りだした。

銃彈が時をりひゅーゝつと飛んで來て、土の中へぶすつぶすつと突き刺さつた。バーンスは、クラウがどうか

して無事に身方の軍に到着してくれゝばいいがと、そればかり祈つてゐた。

二

英軍は殘つた部隊を集結してゐた。聯隊旗や大隊旗がぽつ〳〵そこに立つてはゐたが、その旗の下に集まつた部隊は數へるほどしかない悲慘な狀態であつた。そこへどこからともなく、

「犬が來たつ」。

といふ聲が傳はつた。クラウを見知つてゐる兵卒たちは、

「クラウだ〳〵」。

と叫んだ。そこにゐた一幕僚がクラウを抑へて、ふくらん

一帶に嚴肅な氣分が漂ひ

だ背嚢を解いた。中から聯隊旗が出た。

「聯隊旗だ〳〵」。

幕僚は驚いて大聲に叫んだ。そこらあたり一帶に嚴肅な氣分が漂ひ、誰の口からともなしに英國の國歌が歌ひだされた。それが隣から隣へ傳はつて、はては大合唱がされるやうになつた。

國歌の合唱が終ると、幕僚はいつた。

「クラウだけ歸つて、バーンスの歸つて來ないところを見ると、聯隊本部は全部やられたのだな。とにかくクラウは本部の最後の消息を知つてゐるわけだ。誰かが聯隊旗をクラウの背嚢の中に入れたに違ひないからな。クラウ

昏睡狀態に陷る

を放つて、その後から收容隊を出してみよ。目標はイープル東方の高地。進めるだけ進んで、本部の消息を探つて來い。」

軍醫や看護卒が混つた十人程の收容隊が組織された。

クラウは一目散にバーンスの倒れてゐる所へ進んだ。そして間違ひなくそこを發見した。その時はもう夜であつた。三日月が淡い光で戰場を照らしてゐた。クラウはバーンスの體に走り寄つた。何とか聲をかけてくれるだらうとそれを樂しみにしてゐたのに、バーンスは無言であつた。彼は腹部の銃創のために昏睡狀態に陷つてゐたのである。

眼もくれなかつた

かうしてバーンスは繃帶所に收容されたが、收容後も彼は昏々として睡り續けた。クラウは寸秒の間も彼の枕邊を去らなかつた。或軍醫はクラウの心事がいぢらしいと、粉ミルクを溫かく溶いたものを與へたが、クラウはそんなものには眼もくれなかつた。

數時間の後、バーンスが昏睡狀態から覺めて、ぼかりと眼を開いた時に、最初に眼に入つたものはクラウの姿であつた。クラウはいかにも喜ばしげにすつくと起ちあがつて、バーンスに近寄つた。今までだらりと下げたまゝ少しも動かさなかつた尾を、左右に激しくうち振つた。バーンスは自分がここに收容されたことよりも、クラウが無事に任務を果し得たことを想つて、熱い涙が兩眼からにじみ出るのを禁じ得なかつた。

熱い涙が兩眼からにじみ出るのを禁じ得なかつた

ビクトリア＝ステイション　ロンドンのほぼ中央にある停車場。ホーム　プラットホームの略。

やがて軍からバーンスとクラウとに歸休命令が出て、彼等は久しぶりに懷かしいロンドンに歸ることになつた。

その日、ビクトリア＝ステイションは身動きもならぬ大混雜であつた。多くの人々がバーンスとクラウとを出迎へるために集まつてゐた。列車が物凄い勢でホームにはひつて來た時、「わーつ」といふ歡呼の聲が人々の間から起つた。帽子やハンカチーフが、風に搖らぐ木の葉のやうにうち振られた。

デッキ　客車の前後の乗降口の所。

近寄らうとした刹那に

フラッシュ　フラッシュ＝ライトの略。ここはマグネシュームの閃光。

バーンスは列車のデッキから看護卒に支へられながら靜かにホームに降り立つた。そしてそこに群集してゐる出迎人の中から彼が一番先に發見したのは、彼の懷かしい母であつた。その母がバーンスに近寄らうとした刹那に、彼はもうその年老いた母の胸に顏を埋めてゐた。

一方クラウは、潮のやうに起る歡呼の聲と、電光のやうにきらめく寫眞班のフラッシュとのために、すつかり驚いてしまひ、バーンスに頸環をとられながらよろ〳〵とホームに降りた。

「クラウ〳〵」。

の叫聲が一しきりホーム一杯に響きわたつた。名犬とし

名聲を馳せた

柴田鳩翁　名は亨、江戸時代末期の心學道話の大家、京都の人、天保十年歿、年五十七。

笹の露にも酔ふほどの下戸

て名聲を馳せたクラウの姿を見ようとして、愼み深い英人も、さすがにこの時はどよめきを禁ずることが出來ないやうに見えた。

一一　南京の壺と提燈

柴田鳩翁

さるお町内に婚禮ぶるまひがござりました。お年寄をはじめ、町役家持の人々、一同に座に着きますると、さまざまの馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては、笹の露にも醉ふほどの下戸ぢや。座中をめぐる盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なり

ひらに

わるう。せつとうこつ

こじ廻す

ともお取り下されい」。と南京の古染付の壺に、大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つて來る。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子を召しあがられい」。と勸めるに、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴を致しませう」。と壺を膝へ引上げ、手頸を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて、つまみ出さうとするに、手頸が詰つて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、いろいろにこじ廻してみても、引つぱつてみても拔けず、ま

柴田鳩翁

景清と美保谷が錣曳

壽永四年屋島の戰の時、平家の將惡七兵衛景清が、源氏の兵美保谷十郎の兜の錣を曳き切つたことをいふ。

無理無體に

興も醒める

ごまごしてゐられると、側から見つけて、「どうなされましたぞ」。「いや、手が少し詰りまして、思ふやうに拔けませぬ」。と眞顏になつていはれる。「それは氣の毒。私が壺を持つてゐませう。無理無體に手をお引きなされ」。と一人が向ふへ廻つて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引きあふ有樣、景清と美保谷が錣曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顏になつて、「どうも痛んで拔けませぬ」。といふ。

さあ、これから大騷になり、「醫者どのを呼んで來い」。「骨つぎではゆくまいか」。と酒宴の興も醒めはてました。時に五人組が一人進み出て、「いづれもお騷ぎなされるな。我等承

つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、いとけなき時、大勢の小兒と共に、大きなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりましたと、或人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話によう似てある。いざや我等が司馬溫公となりて、たとへばその古染付の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」としかつべらしく煙管をひつさげ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突きだすと、たゞ

司馬溫公　名は光、溫公は歿後に贈んで贈られた名。支那宋代の名臣。

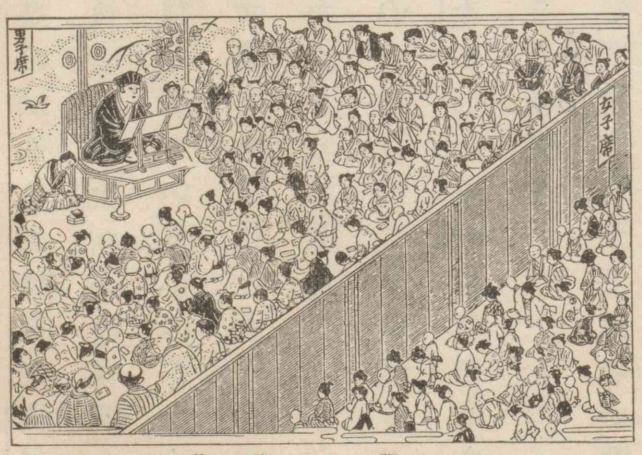
よう。

いざや

一打に打ち碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて、雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄、お助かりなされたか」。とその手を見れば、拔けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんでゐられたと申すことぢや。

なんとをかしい話ではござりませぬか。つかんだものをはなしさへすれば、自由自在に手は拔けるものを、一度つかんだら、首がちぎれてもはなすまいと、片意地な生れつき、それ

何がさて



心學の講義

で自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば、錢金の事のやうなれど、つかむものは、こればかりではない。器量のよいをつかみ、賢いをつかみ、負惜しみをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいをつかんで、はなすまいと、かつぎ歩くによつて、教を聽くこともならず、樂をすることもならず、慎みも出來ず、詮方なさに顏しかめたり、酒飲んでまぎらしたり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは、何いうても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさきに、御用心が第一でござります。

それでも我が本心は明らかな、明德は曇つてはない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これをたと

さりとては

へて申しまするに、私のやうな盲が、一人旅をして、心やすい旅籠屋に泊り、「明日の朝は七つ立をさして下され」と賴む。亭主も心得、朝早う立たせまする時、盲は旅の支度をとのへ、杖を持つて出ようとすると、亭主がいふには、「まだ夜深いに、提燈をお持ちなされ。お貸し申しませう」。「何をいはつしやるやら、盲が提燈を持つて何にするもので」。「いえいえ、お前には、いりますまいけれど、くらがりをとぼ〳〵お出でなされると、往來の人が行きあたりまする。それで提燈をお持ちなされと申すことぢや」。「なるほど、さうぢや。私は行きあたらねども、えて目あきが突きあたる。さやうならお貸し下されい」。と提燈をさげて、道五六町出ました

早う。

えて目あきが突きあたる

ところが、向ふから來る人が、盲に、はたと行きあたりました。

そこで大きに腹を立てて、「おれに突きあたる奴は、盲か。」向ふの人も癇癪に障り、「おれは盲ではない。さういふおのれが、どう盲ぢや。」「いや〳〵、おれは盲ぢやけれども、人には突きあたらぬ。おのれが盲に極まつた。」向ふの人もいよいよ腹立て、「おれを盲といふのは、何ぞ覺えがあつていふのか。」「おゝ覺えがある。おのれを盲といふわけは、この持つてゐる提燈が、おのれが目にはかゝらぬからぢや。」と、ずつと差出す提燈の火は、宿屋の門口で、とうに消えてしまうてある。

なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞暗な提燈をさげて、これでも明らかなと思うてゐるは、本心を見失うて、身勝手な心を、本心ぢや〳〵と思ひ、洗濯せうとも、慎まうとも思はぬ人に、よう似たものでござりますす。どうぞお互に、火は消えてはないかと、日々に吟味が致したいものでござります。

（續鳩翁道話）

一二　峠の家

今井邦子

私たち姉妹が峠の家と呼んでゐた祖母の實家は、和田峠の中腹にあつた。そこは、私の實家のある下諏訪町の區内にあつて、字は西餅屋と呼ばれてゐたが、町からは三里

洗濯せう

今井邦子（いまゐくにこ）
名はくにえ、歌人、長野縣の人、明治二十三年生。

和田峠
長野縣下諏訪町の東北にある。

胸に鮮かに疊まれてゐる

心は矢やうに進んでゆく

も山にはひつた所で、もう和田峠の峰に近い位置にあつたので、春には山草にまじつて、熊谷草や千鳥草などの高山植物が鮮明な色の花を咲かせ、秋には、あけびや野葡萄が家裏の藪に垂れさがるといふやうに、町の生活とは全く異なつた、山の家のおもしろさに、私たちはこの親戚に遊びにつれられて行くのを、何より樂しみにしてゐた。それで、いろ〳〵の思出が、その峠の家を中心に、今でも私の胸に鮮かに疊まれてゐるのである。

まだ學校へあがらない六七歳の頃と覺えてゐる。春もまだ早い頃、私は一人祖母につれられて、その山道を歩いてゐた。向ふの家に着いてからの樂しさを思ふと、心は矢

樋橋　下諏訪町より四粁。

水戸の浪士　武田耕雲齋の一黨。耕雲齋は水戸齊修・齊昭二代に仕へ、幕末に際して大いに尊王攘夷説を唱へたが、後、幕府のために捕へられ、元治二年、敦賀で斬られた。年六十三。

我にもあらず

のやうに進んでゆくが、まだ幼い私の足は思ふやうにはかどらなかつた。樋橋といふ途中にある小さい村を出はづれて、昔水戸の浪士が命を落した所と傳へられてゐる浪人塚の前を通つて、山の中腹から道の上へかぶさるやうに小山ほどの大岩が突き出してゐる香爐岩のあたりにさしかゝつた所で、私は全く疲れてしまつた。國道とはいへ、和田峠の中の一本道、前にも後にも人影はなく、右側の谷を流れてゆく河の水音が身にしみるやうに冷たく響いて、振返ると、もう日は後の山に赤色に傾いてゐる。私は疲れと寂しさが一時に身に迫るやうな氣がして、我にもあらずしく〳〵と泣きだしてしまつた。私の手を引い

先を急ぐ

て一心に先を急いでゐた祖母は、驚いたやうに立ちどまつて、泣きだした私をいろ〳〵に慰めてくれた。そして「ちよつと待つてお出で。」といつて、道の左側の高い崖に攀ぢ登つてゆくと、やがてたゞ一枝、黄色い花のぽつ〳〵と咲いてゐる、名も知らぬ花の枝を折つて來て、私の手に持たせて下さつた。そしてそこから私は祖母の背中に負はれて峠の家に着いたのであつた。祖母はその家に着いた時、喜び迎へてくれた人たちに、「この子を途中からおんぶして來て、もうこれほどしか手があがらないよ。」といつて、頭のあたりまで痛さうに雙手をあげて見せた……。この思出は、峠の家を思ふたびに、必ず浮びあがつて來て、その時

中仙道　江戸時代に於ける京都・江戸間の公道の一で、木曾街道ともいひ、今の長野縣・群馬縣・埼玉縣を經て江戸に入つたもの。

の祖母の姿と、その愛情とを思はせるのである。

十五六歳の少女時代になると、私たち姉妹は、六月の初の農時休暇を待ちかねて、友だちを誘つて、この峠の家に泊りがけで蕨狩に行つたものであつた。

峠の家は古風な萱葺屋根の大きな家で、前は中仙道の國道を控へ、後は深い山に續いてゐた。その山から筧で引いて來てゐる山水は、庭の池にとん〳〵と瀧を落し、池の汀には霧島や山躑躅が目覺めるばかり鮮かな花を咲かせて、瀧の響にゆれてゐた。

私たちは早起をして、作男を供につれて、なほ深い山の方へ蕨を採りに出かけるのである。朝日の光が、いたや楓

さ蕨

配置されたやうにいろどりをなして美しく

淺間山　長野縣と群馬縣との境にある活火山。

や、名も知らぬ古木の繁りを洩れて、朝露に濡れた山道にきら〳〵と輝いた。谷の木の間から聞える鶯の聲をまねながら、私たちは河を渡り、山を越えて行つた。山の窪みのやうな所、野火の名殘の黑土の傾斜などに、太い莖を伸ばして青々とさ蕨は群生してゐた。私たちは歡喜の聲をあげて、競ひあつてそれを折り採つたのである。

流のほとりに休んで見わたすと、青々とした山ふところのところ〴〵に、燃えたつやうな鬼躑躅が、配置されたやうにいろどりをなして美しく、山に登つて眺めると、晴れわたつた大空の東の方に、微かに浮びあがつて淺間山が、それかと思ふ煙をあげてゐる……。澄んだ閑古鳥の聲

明るい靜けさを破つて

が、白雲の山の向ふから時をおいて聞えて來る。近い草原には山鳩がほろ〳〵と鳴きつゞけ、懸巢が時に人を驚かせて騷がしく飛び立つたりするのであつた。……と、この六月の山の明るい靜けさを破つて人聲が聞えて來た。私たちは何となく怖れる心になつて寄り集まり、そちらの方を見定めると、向山の青々とした山襞を越えて一群の人がこちらへ動いて來るのであつた……。しかし互に近づいて見ると、

淺間の煙

記憶もやゝに遠のいてゐた

それは自分たちの學校の先生の一行で、やはり蕨狩に來られたのであつたことがわかつて、互に山の上でをかしさと嬉しさの歡聲をあげた。そして暫くは先生がたと一緒に蕨を折り、お茶を飲み、お菓子を分けあつた。これも、六月の山と共に、永く忘れぬ樂しい思出である。

峠の家は、後に中央線の開通によつて、和田峠を越えて東京へ出る人がなくなり、そのあたりが全く寂れはてたので、一村をあげて下諏訪に引越した時、同じく町に下つてしまつた。私もその頃東京へ修業に出てしまつて、峠の家の記憶もやゝに遠のいてゐたのであつた。

昭和四年の夏、私は鄉里下諏訪町に歸省して、昔の友だ

自動車を驅つて

疊まる青山

山風は遠い昔の樂しい思出を吹き寄せて來る

ちに誘はれて、久方ぶりに和田峠の峰に自動車を驅つて遊んだのであつた。

もう蕨の時期はとくに過ぎてゐたけれど、疊まる青山の東の方が遙かに開けて、淺間山は雲の如き煙をあげてゐた。秋草の花咲きさかる峠路には、まだ鶯の聲が聞えてゐて、山風は遠い昔の樂しい思出を吹き寄せて來るかのやうであつた。

峠の家の屋敷跡に自動車をとめてみると、取拂はれた大きな家の一所を區切つて、バラックのやうな小屋を建て、朝鮮の人がさゝやかな生活を營んでゐた。……庭の筧は跡形もなく、土藏も厩も形もなかつたが、昔そこから汲

んでゐた清水ばかりは滾々と昔のまゝの音をたてて湧き流れてゐた。水邊には朝鮮の人の飼養する鷄が無心に餌を拾つてゐた。

ことほぐ
たゝなはる青垣山
〔禁轉載〕

をとめにてさ蕨つみし峠路に遊ぶ命を友と
ことほぐ
たゝなはる青垣山のはてにして薄雲と見ゆ
火山淺間は

田山花袋
名は錄彌、作家、群馬縣の人、昭和五年歿、年六十。

一三　航海

一濃霧

ごん〳〵——

田山花袋

耳にする
霧の壁
マスト
ほばしら。

いやな〳〵音だ。私は今でもその音を耳にするやうな氣がする。四面悉く霧、灰色の霧の壁だ。何も見えない。私のゐる所が海の眞中であるか、島の蔭であるか、怒濤の中であるか、甲板の上であるか、それが少しもわからない。私はたゞ、灰色の霧の早く流れるのを見た。

田山花袋

ごん〳〵——

ここに船がある、この霧の底に船があるといふことを知らせるための號鐘の音だ。それはすぐ上のマストの所

で撞いてゐるのであるが、そこからはたゞ音が來るばかりで、撞いてゐる人の影も形も見えない。人の影は、幽靈か何かのやうにすい〳〵と私の傍をかすめて行く。

「えらい濃霧だ。」

「これで二日も三日も晴れずにゐてはやりきれない。」

かういふ聲がどこからともなく聞えて來た。

ごん〳〵〳〵――その號鐘を、支那近海で私は一晝夜聞いた。

海岸を縫つて行く

二　甲板の上

海岸を縫つて行く汽船の甲板の上は涼しかつた。私はベンチに腰をかけて、移り變つて行く風景を見てゐた。帆

白堊と甍

が一つ二つ通つて行くかと思ふと、岩石の島に白く波の碎けてゐるのが見えた。あんな所に住んでゐる人があるかと思はれるやうな荒磯の向ふには、小さな白色の燈臺が見えてゐた。或港では、白堊と甍とが、美しく日に照つて輝いてゐた。

赤く禿げた崖、ところ〴〵に立つてゐる松、深く入りこんでゐる入江、風を帶びて白く碎けた波頭、濃い繪具を湛へたやうな碧い〳〵海、浮いたり沈んだり

荒磯

眼を樂しませた

して漂つてゐる漁船、さういふものが絶えず私の眼を樂しませた。

港々からは、艀がいろ〳〵な人を運んで來た。麥稈帽に、浴衣に、海老茶の袴に、蝙蝠傘に、白い服。巡査の劍がきらきらと暑い日に光つたりした。

港の背景をなしてゐる山々の色彩は、何遍となく變つて行つた。碧い空に聳えてゐる群山の中には、嶺を容易に見せないやうな高い山もあれば、鼠色の雲をおびたゞしく湧き起させてゐる山もあつた。

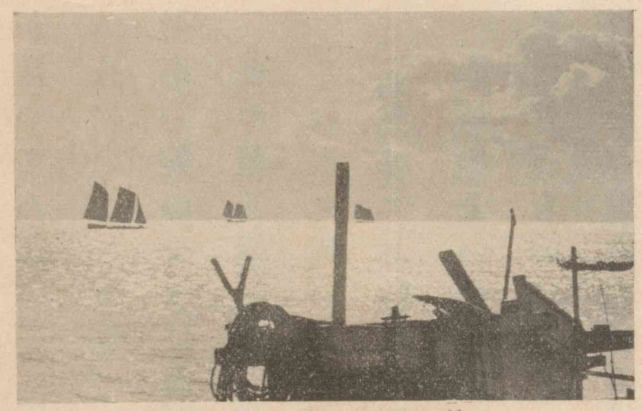
「あれは祖母嶽だ。九州第一の高山だ」などと誰かがいつた。

祖母嶽　大分縣と宮崎縣との境に聳えてゐる。

筆丘映岡松　村濱の夏初

日向宮崎縣。

島の影の靜かに落ちた湖水のやうな入江を通り過ぎて、汽船はまた大洋の方へ出て行つた。まづい煮しめと煮肴との午飯、ボーイの持つて來たお櫃は眞黑に煤煙によごれてゐた。むつとする機關の傍を通つて、舳の方の涼しい所を探して、私は一、二時間晝寢をした。



斜陽を受けて

夕日を斜に受ける時分には、汽船は既に九州の東海岸をずつと日向近くまで行つてゐた。入りこんだ港の向ふの小丘は、

芝草でも生えてゐるやうに圓く綺麗で、そこに薄く日影が當つてゐた。

夜になつても、私はまだその甲板の上にゐた。赤い圓い月が銅盤のやうに海からあがつた。

その翌る朝、私はいつた。

「これが九州の最南端ですな。あの岬が佐多の岬ですな。」

「さうです。」と船員はいつた。

心持のよい晴れた朝だ。まだ五時少し過ぎたばかりだ。私は何ともいはれないやうな心持で、長く海中に突出した岬を見た。右には大きな島が見えた。私はこれから飛石のやうに點々として連なつてゐる島嶼を想像した。大島

佐多の岬　鹿兒島縣大隅半島の最南端。

大島　奄美群島中の最大島。鹿兒島縣に屬する。

にゐる友だちのことなども思つた。ハブのゐる、椰子の實の熟してゐる遠い〳〵島々を想像した。

三　港

「いい月ですな。」

「港に着く時、月の明るいくらゐいい事はありませんな。」

こんなことをいひながら、私たちは本船を離れた。船頭の押す櫓の音は、靜かに、しんとした港の波に響きわたつて聞えた。旅客の心は次第に港の方へと寄つて行つてゐた。

山に凭つて灯が明るく見えてゐる。あそこには、靜かに疲勞を休める旅館がある。新鮮な魚類がある。柔かな蒲團

旅客の心は次第に港の方へと寄つて行つてゐた

がある。

「くたびれた。今日はゆつくり寢よう。」こんなことを誰も皆考へてゐた。艀は月光のきら〳〵する中を次第に灯の多い港の方へと近づいて行つた。

（赤い桃）

一四　椰子の實

島崎藤村

島崎藤村（しまざきとうそん）、詩人、作家、長野縣の人、明治五年生。

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ。
故郷（ふるさと）の岸を離れて、
汝（なれ）はそも波に幾月（いくつき）。

そも

舊（もと）の樹は生ひや茂れる、
枝はなほ影をやなせる。

われもまた渚を枕、
ひとり身の浮寢の旅ぞ。

實をとりて胸にあつれば、
新なり流離の憂。

海の日の沈むを見れば、

生ひや茂れる

渚を枕

新なり流離の憂

たぎり落つ異郷の涙。
思ひやる八重の汐々、
いづれの日にか國に歸らん。

（藤村詩集）

いづれの日にか國に歸らん

土岐善麿（ときぜんまろ）　歌人、新聞記者、東京市の人、明治十八年生。

一五　女學生風俗

土岐善麿

パリを散歩しながら、國の娘たちのことを考へてみると、みないはゆる「洋裝」をしてゐながら、ここの婦人たちとは實に似ても似つかない單純さだ。頰紅・口紅、その容姿のすつきりと趣味的な、洗煉された好み。それに比べて、紺セルの服に木綿の靴下、ひつつめのやうな髪かたちは、いか

似ても似つかない

にも東洋的で、女性としては殺風景に思はれて、遙かに少し氣の毒なおもひを寄せたが、そのパリを去つて、ジュネーブに着いてみると、まづ若い女性たちが、一般に實に天空海濶で、のび〳〵と、健全で、簡素で、パリに比べればいかにも田舎的で、そして甚だよく日本の女學生を聯想させる。僕の娘なども、その中にゐるやうにさへ思はれた。

ジュネーブの夏は明るく、からりと晴れて、レマン湖の光、アルプス連峰の一瞥、胸がすくやうに感ずるが、殊にその中を快活に往來する女性たちの自由なのびやかさは、まづ僕を安心させた。——自分の娘たちも、あれでいいのだ、東京の方がパリよりもずつと健康なのだと思はせた。

ジュネーブ　スキスの都會で、レマン湖に臨む。天空海濶

レマン湖　ジュネーブ湖ともいひ、スキスの西南の隅にあり、風光がすぐれてゐる。

ちやうど登山季節でもあつたから、僕がそちこちスキスをまはつて歩くと、幾團かの修學旅行の女學生に出逢つたが、その女學生たちがリュックサックを背に、力強い瞳を輝かせて、小鳥のやうにはしやぎながら、汽車を下りたり、山路をたどつたりするのは、涙ぐましくなるほどかはいい。服裝も、日本からの舶來品ではないかと思はせるほど手輕なものだ。そしてまるくと紅く肥えた頰のつやも、大地を踏む

スキスの女學生

アルプスにはぐくまれた

リギスキスの中部にあるルツエルン湖の西に聳える山。

足どりも、岩乘で頼もしい。

近頃の銀座に見るやうな、あのいはゆるモダンガールの珍奇な風體は、パリにすらないが、ましてスキスには探してもない。アルプスにはぐくまれた彼女たちには、大自然に對しても氣恥づかしくて、そんな心も形もあらはれないのではあるまいか。

西洋へ行つたら、リボンでも國へ送らうかなどと考へてゐたのだが、そんなものを髪につけてゐるものは殆ど見ない。たゞリギの奥へのぼつて行つた時、牧場の番人小屋の柵によりかゝつて、物珍しさうに僕を眺めてゐた十歳ばかりの少女が、大きな桃色のリボンをかけてゐた。リ

ボンなどは、こんな山深い田舍の子供たちだけがつけてゐるものかも知れない。

デンマークの都會から都會へ、農村から農村へとドライブした時にも、僕は幾度かそこの女學生姿に日本のそれを聯想した。その國は、學校の新しい施設が世界的に有名な一つなので、それも路ついでに參觀したが、オルラップの體育學校では、廣々と清らかなプールに水を漫々と湛へて、その中へ飛びこんだり、隅から隅へ泳ぎまはつたりする女學生たちの元氣一杯な自由さに、この鄕土の力を感じた。外へ出ると、男の學生が幾人も、芝生を刈つてゐた。そこへ二人の女學生が、自轉車のハンドルを握つて來

ドライブ　ここは自動車で疾驅すること。

オルラップ　デンマークの小都會。

た。大部分は寄宿舍生活をしてゐるので、午後の散歩にでも行くらしい。呼びとめてレンズを向けると、はにかみもせずに並んでくれた。

寫眞を撮らせてもらひたいと賴んで、はにかまないこともゆ快だ。ホルゼンスのハイスクールで、運動場にはひつて行つた時は、ちやうど放課時間であつた少年少女が、「撮つてくれ、撮つてくれ」と叫んで、前へ〳〵と押進む。ピントを合はすことも出來ない。あとへさがると、また前へ前へと進み寄る。しまひには老校長が整理してくれたため、やつと二三枚撮ることが出來た。始めての珍客、その前にも遠慮をしないで、肩に飛びついたり、うしろから抱きつ

ホルゼンス　デンマークの都會。

ハイスクール　我が國の中學校・女學校に當る。

ピント　レンズの焦點。

いたり、早速僕をいい「をぢさん」にしてしまつた。そして日本のお伽噺をしてくれと頼む。人なつこさといつたらない。

（外遊心境）

吉村冬彦

吉村冬彦（よしむらふゆひこ）　本姓名は寺田寅彦、物理學者、理學博士、東京市の人、昭和十年歿、年五十八。

をぢさん

一六　涼味の記憶

吉村冬彦

幼い時のことである。横濱であつたか、神戸であつたか、それすらはつきりしないが、とにかくさういふ港町の宿屋に、兩親に伴なはれてたつた一晩泊つたその夜のことであつたらしい。宿屋の二階の縁側に、その時代にはまだ珍しい白いペンキ塗の欄干があつて、その下は中庭で樹木がこんもり茂つてゐた。その樹々の葉が、夕立にでも洗はれた後であつたか、一面に水を含み、そのしづくの一滴ごとに二階の燈火が映じてゐた。あたりはしんとして靜かな中に、どこかで轡蟲が鳴きしきつてゐた。さういふ光景が可なりはつきり記憶に殘つてゐるが、その前後の事柄は全く消えてしまつてゐる。ことによると、夢であつたかも知れないと思はれるほどおぼつかない記憶である。この、それ自身には甚だ平凡な光景を思ひ出すと、いつでも涼風が胸に充ちるやうな氣がするのである。なぜだかわからない。こんな平凡な景色の記憶が、こんなに鮮明に殘つてゐるのには、何かわけがあつたのには相違ないが、そのわけはもう詮索する手蔓がなくなつてしまつてゐ

鳴きしきる

涼風が胸に充ちるやうな氣がする

詮索する手蔓

浦戸灣　土佐灣の中央に深く彎入してゐる灣で、高知市の南方に當る。

桂濱　浦戸灣口の南端にある海濱で、景勝の地である。

る。

中學時代に友人二三人と小舟を漕いで浦戸灣内を遊び廻つた或日のことである。晝飯時に桂濱へあがつて、豆腐を二三丁買つて來て、醤油をかけてむしや〳〵食つた。その豆腐が、多分井戸にでも漬けてあつたのであらう、齒にしみるほど冷たかつた。炎天に舟を漕ぎ廻つて咽喉の乾いてゐたためか、その豆腐が實に涼しさの塊りのやうに思はれた。

浦戸灣

南磧　高知市を貫流して浦戸灣に入る鏡川の河原で、今は柳原公園になつてゐる。

夜目には

熱い食物で涼しいものもある。小學時代に、夏が來ると、南磧（みなみがはら）に納涼場が開かれて、河原の砂原に葦簾張の氷店や賣店が並び、また蓆圍ひの見世物小屋がその間に高く聳えてゐた。晝間見ると、乞食王國の首都かと思ふほどきたない眺であつたが、夜目にはそれがいかにも涼しげに見えた。一夏に一度か二度かは母につれられて、この南磧の涼に出かけた。手品か輕業か足藝のやうなものを見て、歸りに葦簾張の店へはひつて、氷水を飲むか、或は熱いぜんざいを食べた。この熱いぜんざいが妙に涼しいものであつた。店とはいつても、葦簾圍ひの中に緣臺が四つ五つぐらゐ河原の砂利の上に並べてあるだけで、天井は星の降

星の降る夜空

る夜空である。それが雨の後などだと、店内の片隅へ河が侵入して來てゐて、清冽な鏡川の水が小波を立てて流れてゐた。電燈もアセチリンもない時代で、カンテラがせいぜいで、石油ランプの照明しかなかつたが、硝子の南京玉を列ねた水色の簾や、紅い提燈などを掛け列ねた露店の店飾は、やはり涼しいものであつた。

近年、東京會館の屋上庭園などで涼みながら、銀座邊のネオンサインの照明を見おろしてゐる時、ふいとこの幼時の南磧の納涼場の記憶が蘇つて來て、さうしてあの熱い田舍ぜんざいの水つぽい甘さを思ひ出すと同時に、亡き母のまだ若かつた昔の日を思ひ浮べることもある。こ

アセチリン　瓦斯の一種。

東京會館　東京市麹町區丸の内にある宴會場。

記憶が蘇つて

昔の日を思ひ浮べる

の磧の涼味には、やはり母の慈愛が加味されてゐたやうである。

母の慈愛が加味されてゐた

一七　樂　地

幸田露伴

（蒸發皿）

幸田露伴　名は成行、作家、文學博士、東京市の人、慶應三年生。

いかなるところにも樂しきところはあるべし。またいかなるところにも樂しからぬところはあるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天のどかに霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、快き事のみ、懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕べの風には寒さに怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかゞむ冬の時に當りても、うら悲しき事のみの胸を塞

花笑ふ

懷に滿つ

土に生色なく

萎え。

寂びたる趣
話の興を湧かし
苦中の苦
さなきまでも

ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を湧かし、ぬく灰はたく燒芋のあたゝかきに笑むをかしさもあるべし。金殿・玉樓にも樂しからぬをりはあるべく、茅店・草屋にも樂しきところはあるべし。

樂しきところ、樂しむべきところを見出し得れば、いかほど窮苦不快の中にありても、人はおのづからに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなきまでも、人もし常に樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを心がけて、その習慣を我が

身に賦す
江州　近江國。滋賀縣。
碓氷　長野縣と群馬縣との境にある峠。
身すぎの道
去らんとしも

身につくる時は、朝夕に心も潤く、氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうになるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出すの習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔、江州の行商人と他の國の行商人と共に碓氷の坂路を登り行きけるをり、夏の日のあぶるが如く熱きに、商ふ品の嵩、實に重かりければ、二人とも疲れ苦しみて憩ひけるが、苦しさの餘りに、江州のならぬ商人、「碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商をやめて歸り去らんとしも思ふなり。」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人うち笑

しか思はず

身撓んで心撓まず

ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず。この碓氷の山を十ほども重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は皆半途より身も疲れ、心も弱りて歸り去るべし。その時、我一人いかにもして山のかなたに到り、思ふがまゝに商賣してみんとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口をしけれ」といひしとなり。

同じ苦艱の中にありても、よく樂地を觀る者は、身撓んで心撓まず。力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よくよく思ひ味はふべきなり。

（洗心廣錄）

北原白秋

名は隆吉、詩人、歌人、福岡縣の人、明治十八年生。

葛飾の眞間

千葉縣市川市の内。葛飾とはこのあたり一帶の稱である。

銚子

千葉縣銚子市。利根河口に當つてゐる。市川市の邊からは船で江戸川を溯り利根川の本流に入つて行くことが出來る。

一八　歌ごころ

北原白秋

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉の端にもあらはれるものである。

私が一夏住んでゐた葛飾の眞間の寺の坊さんに、或時銚子行の川蒸氣の話が出たので、「ここから銚子まではよほどでせうね」と訊くと、「いや、大した賃錢でもありません」と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんは大變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、飛んでもない俗僧であることを私に知らせてしまつた。

だから、その後に、その坊さんが、「田圃の蛙が鳴いたら石

油をぶつかけなさい」といつてくれた親切な言葉にも、私はさほどに驚きはしなかつたのである。

古池や蛙飛びこむ水の音

大變な違ではないか。

また或時、或三人の男が膝を交へて坐つてゐた。その時、バナヽをお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナヽはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が「はあ、いいな。」といつた。一人は「だめぢやないか、青いな。」といつた。一人は「全く小笠原のは値ばかり高くてね。」といつた。三人とも親しい友だちだつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はそのコーヒー店の主人だつた。畫家はその時、色の輝きを

古池や松尾芭蕉の句。

膝を交へて

見た瞬間に

小笠原　小笠原諸島。太平洋中にある諸島で、東京府に屬する。

觀た。商人は味を感じた。そしてその店の主人は値を考へて、一緒にはつと思つたのである。この中の誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。

畫家は無論、輝いた青い色を觀たばかりではあるまい。その輝きの底に潜むバナヽの生きた命そのものをも觀とほしたに違ひない。

また、かういふことがあつた。

或歌自慢の人が、眞間にたづねて來て、私に歌を見てくれといつた。私はまあ散歩でもしてみようと、一緒に外につれ出したものだ。その人は途々何かしらしやべくつてゐたやうだが、私は夕方の空や、田圃の景色にばかり眺め

生きた命そのもの

可憐な繪模様

入つてゐたのである。

まだ赤い夕燒が西の空には殘つてゐた。眞間の小川の土手の上を歩いてゐると、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう、私は思はず立ちどまつてしまつた。

そこには鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に搖れてゐた。その撓んで搖れ動いてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽とまつてゐた。また一羽來た。枝はいよ〳〵搖れる。枝の先は水へついて、波を立ててゐる。燕の子たちは、紅い頰を揃へて、さも〳〵恐しさうに啼きたてる。また一羽とまると、枝はいよ〳〵搖れだした。ともすると、すべ

り落ちさうになるので、今は必死になつてすがりついてゐる。その艶々した黑い裂羽、いたいけな啼聲。それだけでもかはいいのに、また一羽、羽ばたいて、ついの燕の子はそれを見て、あわてて、いけない〳〵と啼く。これ以上とまつては、枝がすつかり水につかつてしまふのである。空の一羽はとまるにはとまられず、寂しさうに啼きながら翔つては近寄り、近寄つてはまた翔りだす。

燕の子（小村雪岱筆）

さやうなら

「その燕に向つて小石を投げたのである。

私ははつとしたが、それでも默つてゐた。寂しい氣持でほゝゑみながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうして或所までその人を送つて行つてから、「さやうなら、またお出でなさい。」と別れの握手をした。それで歌はとう〳〵見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌かわかつてしまつたのである。無論、どれだけの歌を作る人かもわかつてゐる。

なぜか。

それは、その一事で、その人の人柄がまだ出來てゐないといふことが、はつきりと私にわかつてしまつたからで

ある。心が出來なければ歌は出來ない。

（洗心雜話）

石川啄木

石川啄木（いしかはたくぼく）
名は一（はじめ）、歌人、岩手縣の人、明治四十五年歿、年二十七。

かなしも

そを

一九　ふるさと

病のごと
思郷のこゝろ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

ふるさとの訛（なまり）なつかし
停車場（ていしやば）の人ごみの中に
そを聽きにゆく

わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄などほしとわめく子なりし

なつかしき、
故郷にかへる思ひあり、
久し振りにて汽車に乗りしに

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

石川啄木の筆蹟である。

北上　北上川。岩手縣を縦斷して宮城縣に入り石卷灣に注ぐ。

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

はた〳〵と黍の葉鳴れる
ふるさとの軒端なつかし
秋風吹けば

それとなく
郷里のことなど語り出でて

秋の夜に燒く餅のにほひかな

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせまりし朝を思ひぬ

汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見え來れば
襟を正すも

ふるさとの山に向ひて
いふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

岩手山　盛岡市の西北に聳える休火山。眉にせまる

襟を正す

三〇　新義州より奉天まで

安倍能成

九月一日

眼ざめたのは朝七時前、國境の都會新義州の手前であつた。窓外に見る野川の景色は何となく荒れすさんでゐたけれども、朝鮮第一の大河鴨綠江の下流にあるだけに、新義州驛頭の眺はさすがに雄大である。投げやりのまゝの、あまり著しくない土地の起伏の、低い所は大抵水溜りである。河の水の溢れであらう。高い所には赤煉瓦の家が

安倍能成（あべよしたり）　哲學者、京城帝國大學教授、松山市の人、明治十六年生。

新義州　朝鮮平安北道にあり、鴨綠江に臨む。

鴨綠江　源を白頭山に發し、朝鮮と滿洲國との境を西南流して西朝鮮灣に注ぐ。

ある。その間に青々と茂つたポプラやアカシヤのやうな荒い粗末な木も、周圍の景色にいかにもふさはしい。

間もなく鴨綠江の鐵橋を渡る。朝の河水は白く澄んで見え、江上に浮ぶ船はざつと三百ぐらゐ、その間を船頭一人で漕いでゐる渡舟のやうな舟は、目立つて小さい。向岸の安東は朝靄にかすんで、上流を見ると、河が二つに分れるあたりの洲（す）の草原がぼーつと青んでゐる。

新義州の街

安東　滿洲國安東省にあり、鴨綠江を隔てて新義州と相對する。

河を渡ればもう滿洲國である。安東驛の便所には、白いペンキの札に「厠」と書いてある。これだけでも旅人の感じを變へる力はある。ここで稅關の檢査といふ煩はしさがあるが、私は殆ど荷物を持たぬので、事もなく濟んだ。

鴨綠江の鐵橋

プラットホームから見ると、驛のぐるりには大きなどろやなぎの木が多い。驛に近い公會堂の前の廣場には美しい花壇がある。眼に入る建物は皆

事もなく

滿鐵　南滿洲鐵道株式會社の略。

景色をなごやかにしてゐる。

割合に立派だが、それは皆滿鐵の建てたものばかりらしい。靄の中から車の音が聞えて、藍衣の滿洲國の人が元氣よく姿を現して來る。それに次いで勞働者らしい白衣の朝鮮の人の姿も見える。

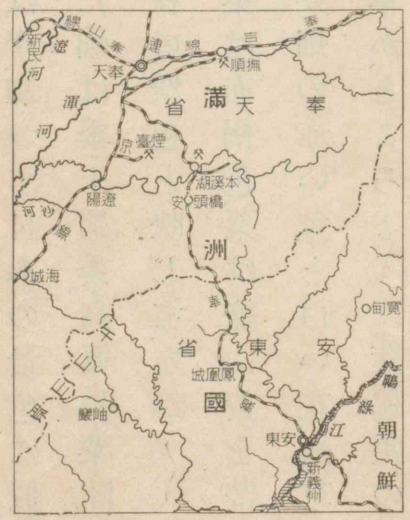
間もなく汽車は出て、安東の町の側を通る。瓦の細かい一種の趣ある屋根に交つて、アンペラのやうな屋根やトタンの屋根も見える。町を離れると小川がある。なごやかな梢をもつた水楊が、その間に點綴せられてゐる。これからの沿線には、どこでもこの水楊が多い。それはたゞ河邊ばかりでない。荒漠とした平野のところ〴〵に羊のやうに點在して、この滿洲國の景色をなごやかにしてゐる。滿

沙河　遼河の支流で、奉天省の沙河といふ村の邊を流れる。

渾河　同じく遼河の支流で、奉天の南方を流れる。

洲國へはひつて、山にも野にも草が多い。朝鮮のやうに土をむき出した所が少い。土の出た所は茶褐色を帶びて、朝鮮の赤土や白砂の色とは違ふ。明るさは少し減ずるが、何となく土地が肥えてゐるやうな感じがする。この土は、或は蒙古の曠原から吹き飛ばされて來た砂土の堆積かも知れない。

とにかく奉天近くの沙河や渾河の流域の平原へ出るまでの安奉線は、到る處、山嶽――それもあまり大きくな



安奉線略圖

突兀たる

豐富な色彩を現じてゐる

く、ところ〴〵にはあらはに突兀たる山骨を露出した岩山もある――と溪流とに富んで、しかもその溪流が皆清澄であり、また樹木が存外に豐富であつて、我々が考へてゐる滿洲國の概念とは合はず、却つて日本の景色に似た所がある。その間に開かれた畑は、黍・玉蜀黍・高粱・稗・粟・陸穗・豆などであるが、それが初秋の空色と映じて、なか〳〵豐富な色彩を現じてゐる。高粱は赤褐色、粟は綠に黃を帶び、豆はまだ青く、その間に蕎麥畑の赤い莖と白い花、煙草畑の鮮綠、それから何といふ草か、ところ〴〵に葉鷄頭のやうな臙脂色をして、さうして筆の穗のやうな形に見える草の畑、野には野菊の薄紫の色が殊に鮮かで、蓼の花の紅

をみなへし

が美しく、をみなへし・みそ萩・草藤・月見草、それから梅鉢草に似て大きい花などが咲き亂れてゐて、車窓の眺は決して落莫でない。旅行をする時には、いつも植物の名を知らぬのがくやしい。名を覺えてゐないと、つい顏も忘れてしまふ。私の眼にとまるなじみの木は、ならがしは・アカシヤ・どろやなぎ・ポプラ・水楊ぐらゐなものである。水楊の葉が風に飜つて、若鮎の腹のやうに美しく光る時もある。

沿線に散在する百姓家を見ると、大抵は横に廣く、奥行は淺い。これは大家族が住むために、室を學校の教室のやうに並べたためかも知れない。その屋根は殆ど直線ではあるが、わづかに中低の弧線をあらはし、藁に泥を混ぜて

安定の感じを與へる

土から生れた産物

葺いたらしい屋根は鈍い凹凸を存して、誇張していへば獵虎の皮に似た美しさがある。とにかく非常に安定の感じを與へる家屋である。この滿洲國の土から生れた産物であることは一見してわかる。中にはまた鼠色の煉瓦を積んで造つた家の、同じ煉瓦の塀の上には透かしの飾をつけ、彩瓦の屋根を設けたのなどもある。家の側面は石を積んで、その間をセメントで固めたのも見える。

滿洲國の農村

こき混ぜて

田野の間には、或一定の距離を置いて存在するらしい小祠がある。これは何を祭り、何を意味するのか、私の聞いた人はみな知らなかつた。これ等の畑や人家の間には、三角形の笠に藍衣を着た百姓の姿が、いかにも似合はしい。或百姓家からは、丈の高いおやぢが、小さな五六歳ぐらゐの子を肩車にして出て來た。おやぢも小僧も、共にくりくりの坊主頭である。牛や馬の放牧されてゐる間に、眞黑の豚がのろ〳〵してゐることもある。小犬ぐらゐの大きさの黑い小豚に至つては、實にかはいく、滑稽である。水の淺い砂河を、牛馬こき混ぜて五六頭に荷車を曳かせて徒渉するのも見える。滿洲國の景色に嬉しい一つは、實にこの

より多く親しみ

この感がある

鳳凰城　安東省にあり、附近に日清・日露兩役の戰蹟が多い。

橋頭　奉天省にあり、本溪湖の南方に當る。

家畜の悠々たる生活ぶり、もしくは働きぶりである。日本で見るよりは確かに家畜は人間の生活とより多く親しみ、自然の景物とより多く調和してゐるらしい。驢馬に跨がつて行く子供、白馬に乘つた三角笠の百姓の姿を見ても、すぐこの感がある。これと似た感じは、西洋の景色を見てもある。

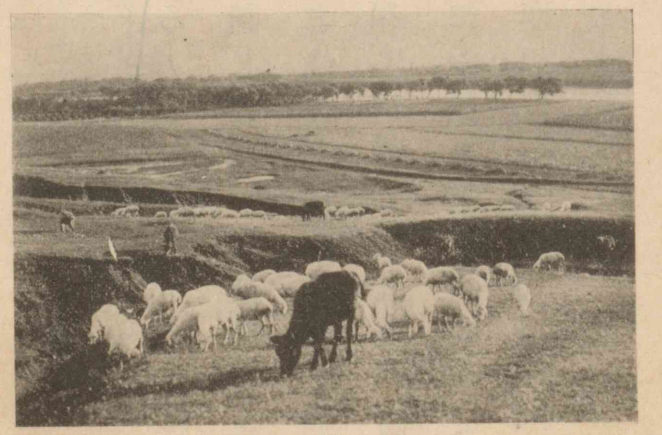
日清戰爭で覺えてゐる鳳凰城には、鳳凰山といふ峻峭な岩山がすぐ驛頭に迫つてゐた。橋頭驛の近くの鐵橋を渡る時、その河岸の處には水車小屋があつた。これは柞(はゝそ)の木を碎いて線香用の粉末にするためだと案内記にある。いづれにしても、山を右岸に迫らせ、畑を左岸に控へ、とこ

水楊の蔭に水車小屋を點じた

襄　ク行
ギャウ
壤　孃　穰

ろどころの水楊の蔭に水車小屋を點じた清淺な河の景色は好もしかつた。

奉天近くなつて、一望千里の平野になつた。去年三月にここを通つた時には、まだ雪が一面にこの大野を蔽うて、刈り取られた高粱のからの堆積が、群鳥の如くにその上に黑く點在してゐたが、今は人の二倍近いくらゐの高粱の頭を飾る穗が、滿洲國の野の豐穰を語つてゐる。



滿洲國の野

（青丘雜記）

蜂須賀隨子（はちすかずこ）
歌人、安政元年生。

お廻し申し上げ候

相成り候やう願ひたく

二　新秋のたより

蜂須賀隨子

一　鈴蟲を贈る

過日は御暑さのをりから、ゆる〳〵お目にかゝり候御嬉しさその節ちよつとお話し致し候鈴蟲、昨日衣のぬぎかへ相濟み、今晩あたりは少しはちい〳〵申し候やと思はれ候間、こゝろみにお廻し申し上げ候。一兩日は少し薄暗き蔭の所にお置き下され候方よろしく候やと存じ候。日に一度胡瓜をつかはされ候はばよろしく候へども、瓶の土は乾かぬやう水をお吹き相成り候やう願ひたく、朝顔の葉二三枚下されめでたくかしこ

大塚楠緒子（おほつかくすをこ）
歌人、作家、東京市の人、明治四十三年歿、年三十六。

をさなき粗飯さし上げたく

興もことなり候はんか御入り願はしく

候はばよろこび候。何もあら〳〵、皆様によろしく、めでたくかしこ。

大塚楠緒子

二　觀月のおさそひ

この金曜日は十五夜の明月にあたり候由、をさなきものを主人役にして粗飯さし上げたく、御近所の菅（すが）様の御子さまがたをもお招き申すつもりに御座候故、篤（あつし）様をお伴なひ遊ばされ、何とぞ御出で下されたく、ちひさきが集まりて、氣まゝに遊び候かたはしに、親どもの語りあふも、日頃のむづかしき御まじはりとは、さまも變り、おもむきもかはりて、興もことなり候はんか。何とぞ御くりあはせ五時頃までに御入り

願はしく、篤様は御機嫌次第にて御女中と早うより御出で下されてはいかゞ。或はジョンのおともも至極よろこばしう存じ候べく、まづは御案内まで、かしこ。

（女流名家書簡選集）

徳富健次郎

ジョン　犬の名。

徳富健次郎　號は蘆花、作家、熊本縣の人、昭和二年歿、年六十。

三　秋さびし

今日はさびしい日である。

ダリアの園を通ると、二尺餘りの茶色の紐が動いてゐる、と見たは蛇だつた。蜥蜴のやうな細い頭をあげて、黑い針のやうな舌をぺらぺらさしてゐる。殺さうか殺すまいかと躊躇して見てゐるうちに、彼はすぐそこにある徑一寸ばかりの穴にはひりかけた。見るうちに吸はれるやうにずるずるとすべりこんでしまうた。

園内を歩くと、蟬の抜殻が幾つも落ちてゐる。昨夜は室内で、小さなものの臨終のうめきのやうな微かな鳴聲を聞いたが、今朝見れば、オルガンの上に、弱りはてたすいつちよがゐた。彼はまだ死に得ない。さうして死に得るまでは鳴かねばならぬのである。

徳富健次郎

自然は老いてゆく

自然は老いてゆく。座敷の前を蜂が一匹歩いて行く。兩

翅をつまんでも、ささうともせぬ。何に弱つてか、彼は飛ぶ力ももたぬのである。そつと地におろしたら、また芝生の方へそろ〳〵歩いて行く。

今日はさびしい日である。

午前は曇つて泣きだしさうな日であつた。

午後になつて、いやに蒸暑い空氣が湛へた。懶い自然の氣を感じて、眼ざとい鶴子が晝寢した。掃溜には、犬のデカがぐたりと寢てゐる。芝生には、猫のトラが眠つてゐる。

南から風が吹く。暖いことは六月の風のやうで、目をつぶつて聞くと、冬も深い木枯の音がする。

今日はさびしい日である。

泣きだしさうな日

鶴子　作者の養女。

今は午後四時である。雲を洩れて、西日の光がぱつとさして來た。散りかゝつた滿庭のコスモスや、咲きかゝつた菊や、殘る紅の葉鷄頭や、蜂・虻の群がる八手の白い大きな花や、ぼうつと黃を含んだ芝生や、下葉の褐色にしをれて乾いた萩や白樺や落葉松や、皆この夕日に寂しく映えてゐる。鮮かであるが、泣いてゐる。美しいが、寂しい。

今日はさびしい日である。

（みゝずのたはこと）

古賀忠道

しをれて

古賀忠道（こがたゞみち）　上野動物園長、佐賀縣の人、明治三十六年生。

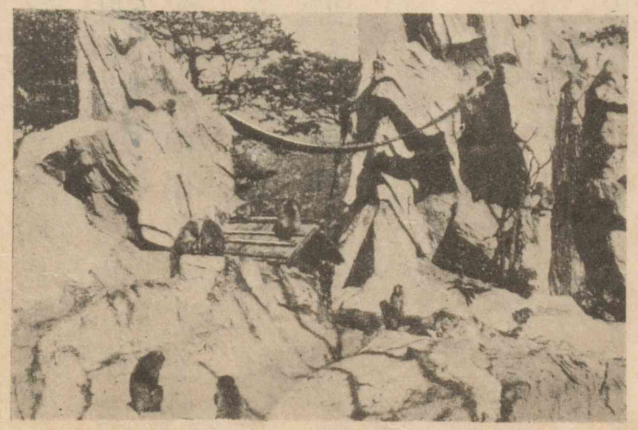
二三　猿心

古賀忠道

今度新しく作つた猿山（さるやま）に日本猿を收容した。

猿は群居生活をなすもので、且またその群棲中に於け

る生活狀態が非常に統制的であり、しかもまた團結的・排他的である。動物園に於ける一群の猿の中へは、新しい猿は殆ど同居せしめることが不可能である。もし新入者でも見つけようものなら、全部の猿たちは集まつて來て、これをいぢめつける。もし新入者が非常に强力の場合には、古いものとの間に猛烈な鬪爭が開始され、大抵の場合は、相當强くても、新入者の方が負かされてしまふさ



猿山（上野動物園内）

うでない場合には、その群中の强いものが、新入者に殺されるまでも爭ふから、新入者は完全に他を征服しなければならないのであり、しかもかういふ事は、大體古い群が共同で抗するために、殆ど普通では起り得ない事である。

我々はこのために、新しい室に多くの猿を入れる場合には、收容すべき猿の數が揃ふのを待つて、一時に收容することにしてゐる。

猿山の新收容の場合も、我々はこれを待つてゐたのであるが、あまり揃はないので、仕方なく數が足らないのを無理に入れてしまつたのである。そしてそれから三日後に、三日ぐらゐならば大丈夫だらうと思つて、新しく五頭

意識してゐる

の猿を猿山に入れてみた。ところが、やはり猿たちは新入者を追つかけ廻すのである。追はれたものたちは、岩の蔭などに頭をくつつけては蹲つて、殆ど抵抗もしない。この時、我々がおもしろく思つたことは、追つかける時、先頭に行くのは、最も小さい、隨つて最も弱いはずの子猿であつたことである。

この子猿は、「僕のうしろには澤山の強い友だちがゐるのだ。」といふことを意識してゐるのであらうか、時々うしろの方を振返つて、多くの猿たちを見ては、新入者を追つかけてゐる子猿の様子を見ると、どうもさういふ風に思つてゐるやうに考へられるのである。

注意を集中した

ちやうどこの時、我々は或目的のために二頭の山羊を猿山に入れたのである。勿論次に起つた事は全く豫期せずに。

山羊を入れると、今まであれほどの勢で新入の猿たちを追つかけてゐた彼等は、すべてこの新しい闖入者である山羊に向つて注意を集中した。もう新入の猿たちのことは頭にないらしい。あの尤もらしい、怒つたやうな顔をして、四肢で立ち、少し後肢を突つ張つて、顔を山羊の眞正面に向けては、がー〳〵と山羊を威嚇してゐるのである。あちらの岩の上からも、こちらの岩の角からも、同じやうに山羊のまはりに寄つて來て、今にも飛びつきさうにす

る。しかしこの大形の山羊に對しては、一頭も本當に飛びついて行くものはない。皆が少くとも一間ぐらゐは離れてゐる。時に一尺近くまで近寄るものがあつても、山羊がちよつと頭をその方に向けると、もう一、二間飛びのいてはまた同じことをやつてゐる。山羊の方はどんなに周圍で騒いでも、全く平氣で、その附近に散らばつてゐる紙や、猿の餌の餘りなどをもく〳〵と食べて歩いてゐる。

猿と山羊

かうしてこの騒が起つたために、彼等の仲間同士の爭は瞬間に全く中止され、この時以來、決して新入の猿をいぢめるやうなことがなくなつた。また、山羊ともだん〳〵馴れて來て、終には厭がる山羊の背中に飛び乘つて、ぴつたり體をくつつけては、寒空に暖をとつてゐるなどといふ利口猿もあらはれ、我々をほゝゑましたものである。

二四　笑話と喩言

一　文盲の犬

「人くらひ犬のある處へは行かれぬ。」と語るに、「虎といふ字を手の内に書いて見すればくらはぬ。」と教ふ。後、犬を見、

書きすまし

虎といふ字を書きすまし、手をひろげて見せけるが、何の詮もなく、ほかとくうたり。悲しく思ひ、或僧に語りければ、「その犬は大方文盲であらう」。

二　目じるし

上洛す

心得たり

田舎より主從二人始めて上洛し、宿にて休息の後見物に出る。下人に向ひ「都はいづれも同樣なる家作なり。よく目じるしをせよ」と教ふ。「心得たり」と領承せしが、晩にのぞみ、宿を知らず。主、腹を立て叱る。返事に「いや、門の柱に唾にて書付を確かに仕りしが、消えて見え候はず。その上になほ念を入れ、屋根の上に鳶の二つありしを、目じるしにしたりしが、それもゐないで見えぬ」と。

腑の抜けたる人

生得は

奇特なることや

三　朱槍

腑の抜けたる人に海老をふるまひけるが、赤きを見て、「これは生れつきか、また朱にて塗りたるものか」と問ふ。「生得は色が青けれど、釜にていりて赤うなる」といふを、合點しゐけり。後、或侍の馬に乘りたる先へ、二間まなか柄の朱槍二十本ばかり持ちたる中間どもの走るを見、手を拍つて、「さても世は廣し。奇特なることや」と感ず。「何をそなたは感ずるや」と問ひたれば、「その事よ。今の槍の柄の色は、火をたいて、むいたものぢやが、あれほど長い鍋がようあつたことや」と。

四　米の飯

客來るに亭主出て、「飯はあれども麥飯ぢやほどに、いやであらう。」といふ。「我は生得麥飯が好きぢや。麥飯ならば三里も行きてくはう。」といふ。さらばとて、ふるまひけり。また或時、件の人來る。「そちは麥飯好きぢやほどに、米の飯はあれども出さぬ。」といふ。「いや、米の飯ならば五里行かう。」とてまたくうた。

件の人

（醒睡笑）

五　鳥のをしへ

或時、片山の邊に於て、小鳥をさすことありこれを殺さんとするに、かの鳥さゝへて申しけるは、「いかに御邊、我ほどの小鳥を殺させ給へばとて、いかばかりのことか候べきや。助け給はば、三つのことををしへ奉らん。」といふ。「さら

いかに御邊

をしへ

ば。」とて、その命を助く。

かの鳥申しけるは、「第一には、あるまじきことを、あるべしと思ふことなかれ。第二には、求め難きことを、求めたしと思ふことなかれ。第三には、去つて歸らざることを、悔むことなかれ。この三つをよくたもたば、誤あるべからず。」と。これを聞きて、この鳥を放ちぬ。その時、鳥、高き梢に飛びあがり、「さても御邊は愚かなる人かな。我が腹にならびなき玉をもてり。これを御邊とり

イソップ　古代ギリシャの寓話作家。彼の作つた寓話が卽ち「イソップ物語」で、それを江戸時代初期に國語に飜譯したのが「伊曾保物語」である。

イソップ

かの鳥をとらばや
つたなき人

給はば、世にならびなく榮え給ふべきに」と笑ひければ、かの人千たび後悔して、ふたたびかの鳥をとらばやと狙ふほどに、かの鳥「いかに御邊、御身にまさりたるつたなき人は候まじ。その故は、たゞ今御邊にをしへけることをば、何とか聞き給ふや。第一に、あるまじきことを、あるべしと思ふことなかれといへり。まづ我が腹に玉ありといへば、あるべきことなるや否や。第二には、求め難きことを、求めたしと思ふことなかれといへり。我をふたたびとることあるべからず。第三には、去つて歸らざることを、悔むことなかれといへり。我を一度放ち、かなはぬものを狙ふこと、去つて歸らざることを悔むにあらずや」と恥ぢしめにけり。

佐々政一（ささせいいち）
號は醒雪、國文學者、文學博士、京都市の人、大正六年歿、年四十六。

その如く、人常にこの三つにまどへるものなり。よきをしへ、目の前にありといへども、これを見聞きながら、たもつもの一人もなし。あながち鳥のをしへたるにもあるべからず。けだものにも劣る人ありといふことを知らしめんがためとかや。

（伊曾保物語）

二五　言葉の變遷

佐々政一

不思議なものは言葉の變遷である。日本語は幸にして二千年近い記錄を存して、世界で頗る古い言語の一つである。しかも、萬世一系の皇室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約一千年前に出來たといは

竹取物語　竹の中から生れたかぐや姫の生立から昇天するまでのことを書いた平安時代初期の物語。作者不詳。

伊勢物語　在原業平の詠歌に基づいて作られた平安時代初期の物語。作者不詳。

れる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國は、いふまでもなく世界中にまたとはないのである。一千年前卽ち十世紀前といへば、今の歐洲諸國などは、皆全くの野蠻國であつた。

佐々政一

日本語はこんなに久しい時代を經てゐるから、同じ語でも、その意味は甚だしく變化したものが多い。例へば、「いへ」といふ語などはその一例であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、隨つて「いへあるじ」といへば、一

雲泥の違

家族中の主長、卽ち戸主のことであつた。然るに今日「いへ」といふと、家屋卽ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは雲泥の違ではないか。

かういふ變遷は、古い時代ばかりにあつたのではない。漢語がしきりに用ひられはじめてからも、同樣の變化は認められる。例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用物はございませ

んか」と呼んで來る。然るに中古では、「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬとんまかあはうのことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた」などと記してあつて、不用といふのは、いたづら者、または無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものはございませんか」と呼び歩いたら、「いたづらものはゐないかね」と呼び歩く鼠取藥の行商人と間違へられたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生じたものもある。漢方醫が廢れて、藥を煎じることはなくなつても、藥罐といふ

爲朝　源爲義の子で、鎭西八郎と稱した。保元の亂後、伊豆大島に流され、同島で自刄した。年三十二。

爲義　保元の亂後、子義朝のために弑せられた。年六十一。

名は殘つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば際限もないが、就中、希代なのは「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器が出來ぬ頃、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、專ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに日本で硬い上等のものが澤山出來るやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで、飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日ではコーヒー茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食べるのや、コーヒーを飯むのは、飯碗・コーヒー碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りにゆかないのが言葉で

ある。

「さかな」とは本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするもののことで、古へは野菜類は勿論、皆「な」である。昆布や若布などのやうな食べられる海藻は、皆磯菜といつた。それから魚類は「な」の中の上等のものであるから、上等の建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」といふ語は、これから來てゐる。然るに、酒といふものは、上戸卽ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒

席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふことにきまつてしまふと、下戸が食べてもやはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べてもやはり茶碗といふのと同じ不思議である。

言葉はまた使つてゐるうちに、だん〳〵下落するものである。例へば、「大工」といふ語は、工卽ち工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの頭を呼ぶ名であつた。然るに今日では、建築事業にたづさはるものは、小屋掛のたたき大工でもやはり大工である。かの棟梁・親方なども同樣で、今日は一人の手下もなく、子分もない男でも、印半纏さへ着てゐれば、卽ち棟梁であり、親方である。

人爲的の言葉

最後に一つ、故意に轉訛せしめた例を示さう。言葉の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには故意につくつた人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止せられたやうだ。

その他には、迷信から來た變造語もいろ〳〵ある。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を、「惡し」と聞えるのを忌んで、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるとて、「よ」といつたり、梨を「ありの實」、硯箱を「あたり箱」、鯣を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古へも伊勢神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髮のない僧侶を、わざと「髮長」といつた例もある。

蓋し窮極を知るべからず

要するに言語界の不思議な現象は、同一の語が、例へば髮長といつて髮のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

（醒雪遺稿）

國民精神篇

日本國民性 その一

一

個人の特質は、その人が生れながらにもつてゐる素質と、境遇の影響や修養の結果つくられた性質とが一緒になつて出來たものである。國民としての特質も同様で、その國民が、祖先からの遺傳によつて、生れながらにもつてゐる素質と、その國の氣候や風土、社會の組織や生活の狀態、または外國から來るいろ〳〵な文物や思想等の影響

によつてつくられた性質とが一緒になつて出來たものである。

かうして、日本國民には日本國民としての特質があり、イギリス國民にはイギリス國民としての特質があつて、それ〴〵他のものと紛れることのないはつきりとした一つの性質の型が認められる。これが卽ち國民性である。それでは、我々日本國民の特質とは、どんなものであらうか。その主なものを左に擧げてみよう。

日本の國家は、諸外國のやうに個人を單位として組織されてゐるのではなく、家を單位として組織されてゐる。そして、その家は、家長を中心とし、親子といふ最も自然な

關係をもととして家族がまとめあはされてゐる。卽ち家族を結びつけ、まとめあはせてゐる力は、親心・子心であつて、そこには他から無理に押しつけられたやうな不自然なところが少しもない。どこまでも美しく爽かで、且力强い團結なのである。

しかもかういふ家は、もと〳〵皇室を宗家として分れ出たものであるから、皇室と國民との關係は、また家長と家族との關係と相通じてゐる。つまり君臣の義と、父子の情とを兼ねたものが、我が皇室と國民との關係であつて、天皇は國民を赤子としていつくしみ給へば、國民は天皇を親とも仰ぎ奉り、敬慕し奉るのである。

桃園天皇
第百十六代。

桃園天皇の御製に、

神代より世々にかはらで君と臣のみちすなほなる國は我が國

と仰せられてあるのは、この事を示し給うたものである。

このやうに、自然の人情と、自然の道理とに從つて、美しく力强い國家を組織してゐる日本國民には、どんな場合にも、一つの中心に向つて統一され、渾然たる一體となつて活動する特質のあることが見出される。いひかへれば、各個人が銘々自分勝手なふるまひをせず、何事も家を中心とし、國家を本位として行動する性質で、これは日本の國民性のうちで最も著しい特徵をなしてゐるものであ

らう。

日本國民にはまた、外國からどんな文物・思想をとり入れても、それを同化して、固有の文物・思想の中に融合してしまふ性質がある。これは、我が國の文化を正しく發展させる上に、昔からどれほどの貢獻をなしてゐるか知れない。例へば、支那から儒教をはじめ、種々の學問や制度をとり入れたが、我々の祖先は、それ等をみな見事に消化して、日本の儒教なり、學問なり、制度なりにしてしまつた。漢字をとり入れても、それをもととして片假名や平假名をつくつた。繪畫や音樂にしても同樣で、みないつの間にか、日本畫となり、日本音樂となつて發達して來てゐる。印度か

らは佛教をとり入れたが、それも次第に日本風なものとなり、日本の國體にもしつくりと合ふ宗教として弘められてゐる。明治以後は、西洋の文物や思想が盛んにとり入れられ、そしてこれ等もみな敏速に日本化され、新しい日本文化をつくり出す上に役立てられてゐることはいふまでもない。

文化の影響は實に力强いもので、或國家が他國の文化をとり入れても、それを同化し、自國の文化に融合することが出來なければ、その國家は少くとも精神的に他國の支配を受けなければならないやうな結果を招くこととなる。我が國が昔から、他國の長所を絶えずとり入れなが

らも、國家の尊嚴性を傷つけられることが少しもなかつたのは、あらゆるものを同化する國民性によるところが多いのである。

二

親心・子心をもととして國家生活を營んでゐる日本國民の性質は、少しもゆがんでゐない。自然のまゝにすなほである。このやうに僞らず、飾らず、純眞無垢であるところもまた、我が國民の特質といふことが出來る。

かういふ性質によつて、昔から清淨潔白を好み、罪や穢を忌み嫌ふ念が強く、また正直で廉恥を重んじ、正義を尊び、節操を守つた。そしてその態度はおのづから公明正大

となり、卑怯未練なふるまひを卑しみ、武勇を尊ぶやうになつてゐる。かの世界に誇るべき武士道も、かゝる性質があつて始めて發達したものである。

純眞といふことは、單純といふことと自然に一致する。日本國民の生活の樣式や、趣味や、藝術などに共通した特徵は、簡素と淡泊といふことである。衣服も住宅も庭園も、或は音樂も文學も繪畫も、すべて單純と瀟洒をもつて生命として工夫されてゐる。質素儉約を重んずるといふやうな氣風も、ここに根ざしてゐるのである。

純眞にして單純な性質は、一方また日本國民をして直觀・直覺の働きに長じさせてゐる。それであるから、所信を

斷行する勇氣も強く、義に勇み、仁をなすといふ性質が著しい。物事を理窟一方で解剖したり、功利打算の考のみをもととして處置したりすることは、日本國民の性質には合はないのである。

快濶で明朗なことも、我が國民性の大きな特徴である。隨つて、淡泊で、樂天的で、物事に屈託しない。かういふ性質によつて、おのづから實行を尊重する。我が國は昔から「言擧せぬ國」といはれてゐる。空理空論を弄ばない國といふ意味である。不言實行の國といふ意味である。

このやうに快濶で明朗な日本國民は、物事に臨んで、暗い方面よりも、明るい方面を見ようとする。災難などに出

あつても、泣き言をいはず、さつぱりとあきらめてしまふのである。本居宣長の

敷島の大和心を人問はば朝日にほふ山ざくら花

といふ歌は、日本國民のかういふ性質を、さながらに歌つてゐるものとして、國民の間に愛誦されてゐる。ほんのりと朝日に照りはえた山櫻の花、咲く時も散る時も、美しく潔いあの櫻こそ、我が國民性を最もよくあらはしてゐるものであらう。

日本女子讀本　改制第一版　卷三　終

昭和十二年六月二十五日印刷
昭和十二年六月二十八日發行
昭和十二年十二月五日訂正再版印刷
昭和十二年十二月八日訂正再版發行

日本女子讀本 改制第一版
各卷 定價金六拾錢

著作權所有

編者 東京市世田谷區世田谷一丁目九七八番地 高木武
發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 富山房
代表者 坂本嘉治馬
印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地 精興社

發行所 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 富山房
電話神田二、一七一—二、一七八番
振替貯金口座東京五〇一番

野本製

二ノ五

松屋キミエ